

万象 平成十四年十一月十三日第三種郵便物認可  
令和七年二月一日発行（毎月一回一日発行）  
第二十三卷 第十一号（通巻二七五号）

# 万象

B A N S Y O

二月号

2025. 2



二月の句

梅咲いて鳴る水にまた会ひにけり

細見綾子

梅は約1500年前、中国から伝来し、花の美しさ、気品のある香りから日本人に愛され、万葉の世界では花といえ、梅をさすほどであったらしい。

この句は、綾子が昭和48年、山辺の古道を歩いていた時の作。可憐な梅の花を見ながら歩いていると、どこからか水の音が聞こえてきた。さらに進むとまた溪流の水の音に出会ったという句であるが、「鳴る水」にまた出会ったという表現から、春の旅の楽しさが心に伝わってくる。

綾子の句には自由と明るさがあり、ことばが研ぎ澄まされていて、心に残る句である。

(岡田あゆみ)

令和七年

二月号

# 万象

BANSYO

ひかりとあそびたい  
わらったり  
哭いたり  
つきとばしあったりしてあそびたい

『八木重吉詩集』より

# 万 象

令和7年2月号

名誉主宰作品 初 明 り ..... 内海 良太 4

主宰作品 冬たんぽぽ ..... 江見 悦子 5

## 風音集Ⅰ・Ⅱ

小林 愛子

中村 千久・福島せいぎ・柳澤 宗正・曾根 満

松原智津子・亀田やす子・沢辺たけし・吉中 愛子

榎本 文代・神田美穂子・井村 和子・前田貴美子

風音散歩<sup>(27)</sup> (二月号) ..... 小林 愛子 10

万象の窓<sup>(35)</sup> 「切れ」について 1 ..... 江見 悦子 11

## 同人作品

江見悦子 選 ..... 12

### 同人会だより

同人名簿についてのお願い ..... 大久保 進 33

12月の「万象」オンライン同人句会高点句

同人作品の佳句 ..... 江見 悦子 34

### 同人特別作品

寒を生く ..... 荻野加壽子 36

北の大地 ..... 入山 繁幸 37

特別作品評 (十二月号) ..... 下嶽 孝一 38

会費納入のお願い	.....	万象俳句会・万象同人会	会計	39
続・風のしをり⑭	子規と私(一)	細見綾子	編集部	40
万葉の抒情⑱	『万葉集』にたずねる抒情の源流⑱	橋本 清		41
句集鑑賞	倉谷紫龍句集『群青の湖』に寄せて	江見 悦子・中者 正機 霧田 勝子・中村 優		42
万象ノオト「図書館」	.....	広瀬 俊雄・村田由美子・鈴木美由紀 仲山さよ子・中森ひろえ・汐見 克彦		44
<b>万象作品</b>	江見悦子・内海良太 共選	.....		46
珈琲ぶれいく⑤⑦	.....			56
万象作品の佳句	.....	江見 悦子		57
北から南から	歴史の舞台となった街(大阪)	.....	入山 繁幸	58
新中央句会報(11月例会)	.....			59
ルビーの小函(二月号)	.....		編集部・校正担当	63
東西南北	.....			64

初 明 り

内 海 良 太

(名譽主宰)

上総丘陵地

雲海をあまねく照す初日の出

雲海にひろがつて来し初明り

霜解の寺千枚の莫塵薙

器量よきひげの野老を飾りけり

鹿野山神野寺

四脚門の修復めでた初日受く

ひよどりの健啖ぶりを万両へ

晦の高きに昴明るかり

冬たんぽぽ

江見悦子

(主宰)

田中一村展

一村を観て黄落の上野山  
靴鳴らすマイムの男紅葉晴  
『赤い鳥』創刊の地や青木の実  
空揺りすずかけ黄葉乾く音  
足場取れ冬日の窓の広さかな  
ポケットに折れし半券年惜しむ  
足弱の夫送り出す冬たんぽぽ

冬の鴝

小林 愛子

(名替顧問)

師の墓の木立に棲みて冬の鴝  
日面に小虫がびびと花八手  
隣より種の少なきおでん来る  
重ねあふ枯菌朶の葉をしどけなく  
天動説なにはともあれ鯛焼を  
寝て起きてわが身より立つ冬の塵  
肉餠を割れば洞あり年の果



枯野人

中村千久

(編集人)

初明り

柳澤宗正

(顧問)

ゲラ刷りの宛字にルビを漱石忌  
万巻の古書モリスン書庫に冬日のどかざる

枯はちす人寄せ付けぬさびの色  
高らかに師走の空へ護摩の声

野良猫に又の名ありて冬日和

街頭の北吹く中や托鉢僧

刃噛む冬至南瓜の無骨なる

パソコンの早朝予約初明り

夕映えの影となりゆく枯野人

山荘へ歩荷の担ぐ大初荷

万両や宝づくしの伊万里壺

枯木山何鳴き交す鴉どち

桃太郎

福島せいぎ

(顧問)

福は内

曾根満

(同人会会長)

掘割を泳ぐ白鳥空遠く

冬と春その境目の福は内

葉がくれに枇杷の花咲く吉備路かな

立春やふはりと舌に茹で卵

ジーンズや備前の壺にあけびの実

節忌や鋏を支へ支へに一休み

\*節忌……小説家・長塚節の忌日二月八日

綿虫や駅の広場に桃太郎

愛の日や下駄箱覗き退庁す

人よけて歩く倉敷秋闌くる

涅槃会や三和土の壁に網代笠

雲は秋瀬戸内海に島いくつ

栈橋に芥のたまる寒戻り

年の暮

松原智津子

(北海道)

落葉松の林素通り空つ風

雪三日書かず仕舞ひの日記帳

天文台屋根閉ぢ丘は冬枯るる

華げど電飾の道うそ寒し

物騒ぎ増えて今年も年の暮

柚子の実

亀田やす子

(栃木)

あぢさゐの全き枯れや茶筌塚

花嫁を抱き上ぐ銀杏黄葉かな

枯鶏頭根こそぎ抜きてがらんど

柚子の実を描き遺して姉逝けり

白菊を冷たき姉の胸もとに

地始めて凍る

沢辺たけし

(千葉)

護摩壇の天蓋煤け冬に入る

しぐるるや北山杉の黒き幹

針刺に縫針もどす一葉忌

鎌鼬錆朱の月の上りけり

膝関節きしみ地始めて凍る

霜

晴

吉中愛子

(東京)

霜晴の斑入りの松の出荷かな

明けきらぬ櫂の空の雪催

冬あたたかあんぐり笑ふ埴輪かな

外濠を日の細りゆく枯尾花

丸き背の影を正して十二月

冬うらら

榎本文代

(神奈川)

ねつとりもほくほくもあり蒸し芋  
茶の咲いて日差し背中にたまりけり  
校庭の掛け声とべり干蒲団  
乳足らひしみどり児胸に冬うらら  
シクラメン鏡にあふれ美容室

街 師 走

神田美穂子

(静岡)

蛇行せる川を抱きて大枯野  
はからずも富士とながなが日向ぼこ  
じやんけんの一人左手冬ぬくし  
菊坂の路地のどんつき枇杷の花  
こびりつくダクトの油街師走

除 夜 詣

井村和子

(石川)

思案橋遠まはりして翁の忌  
白寿なる媪爪染め文化の日  
暖炉燃ゆ笑ひ上戸と聴き上戸  
柚子風呂に心の傷を癒しをり  
道草も宜しと神籤除夜詣

寒 き 赤

前田貴美子

(沖縄)

芙蓉実アザミに雲は重たく渦を押す  
うすら日や水鳥を置くしづけさに  
水鳥を観ミナトに来て那覇からと答ふ  
御嶽ウツキまで草の水漬ツグきや冬の雷  
寒き赤薔薇は忌日をつくしたり

# 風音散歩 ② (二月号) 小林愛子

鎌鼬 錆朱の月の上りけり 沢辺たけし

「鎌鼬」は日本に伝わる妖怪、もしくは其れが起こすときれた怪異である。つむじ風に乗って現れ、出会った人は刃物で切られたように傷つく。鎌鼬は風そのものではなく「風の妖怪」の名称。東北地方や信越地方の民間伝承として知られる。正体は自然現象ともいうが、人体が傷つけられるほどの真空を生じる自然現象は無いという。最近の有力説は、寒いところで起こるあかぎれ説、他がある。

科学がいろいろ暴いてくれるが、子供時代は怖いものが多かった。自然を畏れて暮らしていた謙虚さが懐かしい。鎌鼬の夜は「錆朱の月」とは、妖しきものへの予感に満ちている。

水鳥を観に来て那覇からと答ふ 前田貴美子

鴨、雁、鴉、鴛鴦、白鳥、鷗など水に浮かぶ鳥を纏めて水鳥という。川や湖沼や海の面にもっとも多くみられる。浮寝鳥ともいう。秋に北から来て、春に北へ帰る冬鳥である。

「水鳥を観に来て」の後ろに「どちらからお出ですか」という問いが省略されている。問う側も水鳥でなく作者の行動に興味を示したので、句には飛躍と省略がある。では作者の水鳥の感想は？ 答えは「那覇からと答ふ」にある。足を運んでよかったと言っている。

枯鶏頭根こそぎ抜きてがらんどう 亀田やす子

「名の草枯る」が季語であるが、それに草花の名を冠した形で「枯鶏頭」が季語。秋の空気に赤を深めた鶏頭もすっかり枯れ果ててしまった。熱帯アジア原産の力強い草なので枯れたとはいえ花殻も茎もがっしりしている。「根こそぎ抜きて」なので、大きく開いた穴は「がらんどう」。先ほどまであったものの何もない不確かさ、これより冬本番に向かう。

冬あたたかあんぐり笑ふ埴輪たち 吉中愛子

「埴輪」は古墳外部にならべられた素焼の土製品。古墳時代の人が生み出した日本独自の焼物で、円筒埴輪と形象埴輪があり、主に権力者の死への弔いに。紛らわしい土偶は細文時代のもので、主に安産や豊穡への祈りのため造られた。

句は「あんぐり笑ふ」とあり、穴で表現する埴輪の特徴を捉えて微笑ましい。「冬あたたか」は外気にも精神的にも当てはまる。開いた暗い口中に歴史の深淵を覗き見るようだ。

天文台屋根閉ぢ丘は冬枯るる 松原智津子

天文台は何処にあるのだろう。北海道と言えば銀河の森天文台（りくべつ宇宙地球科学館）の、満天の星空を堪能できる日本最大級の天文台が頭に浮かぶ。どこであれ天体観察のため広い丘の上に建つ。冬はマイナス20℃を下回る地である季語の「冬枯」は古俳句に用例が多い。屋根を閉ざした天文台を置いた丘は、文字通り荒涼とした景色をあらわす。

# 「切れ」について 1

江 見 悦 子

俳句表現の基本は「十七音、季語、切れ」にあります。今回は「切れ」について考えます。  
『俳文学大辞典』によれば、「切れ」についてはこうあります。

一句の中で強く言い切られるところ。俳句は短いために、ただ言い続けたのでは、文の断片としか感じられない場合がある。一句の自立する効果を上げるためには句の途中、あるいは句末を強く言い切ることによつて、そこに詠嘆の気持ちを含めることが有効である。」

毎年 of 万象俳句賞、中山純子記念俳句賞の応募作品を読む時に注目するのが、一句の中に「切れ」があるかないかです。先ず目に止まるのは「や、かな、けり」等の代表的な「切字」です。

「切れ」の位置について、上五の切れ、中七の切れ、句末の切れと分け、具体的な例を挙げながら「切字」との関係を考えてと思います。(第二十二回万象俳句賞の作品を例に)

①上五の切れ

A 豊年や絶えずどこかで鳥のこゑ      D 秋の水乱すこと無く鮠の群

②中七の切れ

B 草に降り草を弾めり雀の子      E 甲斐駒ヶ岳に一片の雲鷹渡る

③句末の切れ

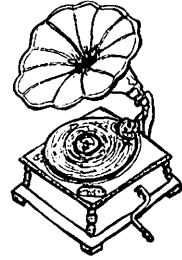
C 母に先づ白磁に注ぐ新茶かな      F 浜小屋は津波に吞まれ星冴ゆる

ABCでは、詠嘆の助詞「や」「かな」、完了の助動詞「り」が使われ、そこではつきりと切れま  
す。「切字」があつて「切れ」のある句です。BCは、一句一章、Aは、形は一句一章ですが、句  
意は二句一章になります。

DEFは、D「間としての句切れ」、EF「意味上の断絶」があつて「切れ」のある句。Dは、  
「秋の水を」の「を」が隠れている一句一章の句。EFは、二句一章の句。

さて、ここで整理が必要になってきました。次回をお待ちください。

# 同人作品



江見悦子選

○は佳句に選ばれました。

札幌 岡本敬子

首塚の不思議初冬の大手町  
枯れ色へ機体ごとんと着陸す  
ドボルザーク夫菰巻を終へてより  
銀杏ちる晶子の「鳥のかたち」して  
透きとほるよき餡色や大根漬

札幌 林陽子

一陣の風よ華ぐ檀の実  
工夫して渋抜きせよと柿百個  
秋暮るる煙草を兄の枕辺に  
隠り世へ妻丹精の菊の香を  
秋時雨先行く夫の小さくなり

札幌 落合裕子

生垣の角の際立つ一位の実  
暗闇に供花の龍胆花を閉づ  
脚元は太く短き秋の虹  
紅葉山潮騒めける風の音  
綿虫の朝から舞ふ日人恋し

札幌 濱谷和代

マロニエの葉擦れの音や冬に入る

夜半の雨踏みどころなく銀杏散る  
葉脈はレースのごとき落葉かな

○風木舎朴の枯葉の乾ぶ音  
駅舎へとガス灯滲む夕時雨

札幌 大内 和憲

義歯作る渾身の音夜長の灯  
白息の園児はげます白き息  
初雪をまとひ急患とび込めり  
海猫百羽空へ放れる冬怒濤  
雪に尿して子の影のはづみ来る

札幌 紅 露 恵 子

白壁に夕日のぬくみ赤蜻蛉  
年輪を株に数ふる秋日中  
日輪の白き光や霧の中  
大業な耳石の動きそぞろ寒  
街並の屋根の真白や今朝の冬

札幌 大内 マキ子

牛の背に寝藁投げ込む冬仕度  
棟上げの槌音高し寒日和  
開拓の農具錆ゐて冬来る

開拓の一戸置きざり冬野原  
声発し赤児も雪の子の仲間

札幌 中 鉢 弘 一

初雪や部厚き「冬」の一ページ  
寒林の樹間斜めに日の差せり  
散る落葉生きものごと見つむる児  
漆喰の天井アート冬館  
すり鉢を抱へ胡坐のとろろ汁

札幌 北 浦 詩 子

○二の腕に硬き刺し跡蚊の名残  
降る雨の傘に重たき十一月  
川堰の飛沫の濁り今朝の冬  
みぞおちに沁むる辛さや爛の酒

札幌 谷 廣 司

東京へ主翼が弾く秋日濃し  
筋なして麓へ続く草もみぢ  
茎細き終のダリアを枕辺へ  
刈り取られなほ芳しき霜の菊  
佗助の終の一花の真白なる

江別 佐藤 藤 哲

一村がゆるぎてをりぬ稲の波  
風筋に負けて原野に雪しぐれ  
○オロシヤ向く砲台跡や枯野原  
分校の廊下飛び交ふ雪ほたる  
冬どなり石積みあげて番屋閉づ

江別 太田 佳美

園児作る砂のケーキに一位の実  
採れ過ぎと笊の熟れ柿家主より  
皺の手にかたこと転ぶ胡桃二個  
蝦夷鹿の過ぎるを待てりローカル線  
暮易し植込みの松獣めく

新潟 高橋 ひろ

白鳥の群れひとつづつ日が包む  
冬の田の足跡にある水溜り  
枇杷咲くやいつもは洗濯物干し場  
冬の田と隣る煎餅工場の灯  
北吹くや小学校の矮鶏の小屋

新潟 高野 松風

ゆるゆると上る脚立や柿吊す

赤とんぼ勲章のごと胸につき

実むらさき零るるままに挿しにけり

火袋に日の移りけり実南天

稽穂の茎一本の力かな

新潟 森山 暁湖

張り付きてどつと落ちさう冬銀河

刈田原電車の汽笛よく響く

せつせつと冬木を囲ふ杭削る

首筋へ朝の寒さの入り込む

赤蜻蛉夕日溜りへ寄り来る

益子 光岡 れい子

天平の丘どこまでも草紅葉

椋の群れうねり夕闇深くせり

野地蔵の足に染み入る夕時雨

ソプラノの声透きとほる小春かな

柿釉の皿に柚子盛る陶器市

芳賀 大村 かし子

溶接の仕事勤労感謝の日

里山に国旗の揺るる石落日和  
仏壇に据り艶めく富有柿



又一つ買つてしまひし冬帽子  
妣の忌や庭に輝く石蒔の花

宇都宮

阿久津勝利

鳥渡る小さき島の小さき畑

マージャンのロンと声張る紅葉宿

氾濫の能登の田んぼや冬に入る

小春日や白寿の伯母の鋤捌き

ジャズに酔ひカクテルに酔ふ夜長かな

栃木

上岡佳子

八千草を分けて三龜山の万葉歌碑

鴨来る沼に夕波重ねては

門に入る朴の枯葉やからころと

谷中湖の残照長し枯尾花

小春日や白抜き暖簾の蔵の街

佐野

増田幸子

朝日透く竹の真直や残る虫

秋夕焼稚魚さらきらとめまぐるし

晩秋の東京おのづと足早に

○夕日截り川波切りて鴨の五羽

冬立つや湖尻の波に綾ありて

佐野 加藤季代  
冬めくといふは風より風音に

葉牡丹の渦に宿れる昨夜の雨

木枯や水面を走る風の筋

浮寝鳥尖れる波に身を任せ

白鳥の沼に華ぎ戻りけり

佐野

阿部

澄

団栗や前歯の抜けし男の子

閉院の貼紙小さき今朝の冬

すずかけの幹しろじろと冬に入る

とげとげの菱の実句座の手から手へ

○迷路めく地下駐車場冬ぬくし

佐野

芝宮留美子

秋空を舞ひ来る浅葱斑かな

冬うらら紅の際立つフラミンゴ

白映ゆる篠懸の幹小六月

袴着の長き石段上りきる

小春日や筥迫胸にすまし顔

佐野

島田和枝

夕月を一筋よぎる茜雲

源泉のあふるるままや初紅葉  
どこまでも真青なる空文化の日  
小春空一刷毛の雲ゆつたりと  
雑木山ゆさぶる風の冬めける

佐野 売野

緑

駆け廻る犬の背丈に穉の穂  
秋祭園児の真似る天狗舞  
今朝の冬一間の畳拭きにけり  
立冬の殊に輝く一番星  
鉄橋の音の高まる冬銀河

佐野 店網洋子

穉穂の小さき粒をてのひらに  
干し竿に真珠のごとく露の玉  
コスモスを摘むコスモスの風の中  
石路の花円仁像の足許に  
冬の日や樹樹のさざめく佐野城址

足利 大木 茂

彗星の西へ落ち行く十三夜  
古書街の空き地落葉の吹溜り  
園庭に梅檀大樹冬立てり

赤福餅茶屋に時雨を聞きながら  
赤城嶺の潔き蒼冬来る

土浦 澤 照枝

旅の荷の夫と揃ひのスウェーター  
鴉翔つ柿艶やかに熟るる庭  
枯蟻螂腹を返して動かざる  
薄目あげ猫ねまる縁干布団  
枇杷の花目白群れ来るつくば径

加須 茂木 弘子

一木を螺旋に巻くや猿茸  
日矢とどく薄の絮の飛ぶ小道  
○川音やしどろに伸ぶる秋の草  
柳散る水の抜かれし沼底へ  
湖照るや桜紅葉のちらほらと

さいま 山本 右近

木枯や小江戸に残る火の見台  
千枚の棚田けぶるや能登時雨  
冬の雁余呉湖に太き日矢さして  
不忍池の枯蓮びびと枯の韻  
綿虫や旅衣なる芭蕉像

所沢 三好かほる

土窯河井寛次郎邸に火伏札貼る秋の風

陶人の秋日を弾く蹴り轆轤

木瓜の実のころがる庭に登り窯

女子学生パイを焼きをる文化祭

鳶鴉戦ふ空や冬河原

所沢 南雲 秀子

○吊橋の先まで紅葉明りかな

寒山寺の鐘ひびき来る紅葉谷

晩秋の谷間にひびく鳶の笛

一日で坊主となりし実千両

剥きかけて夫の残せし青蜜柑

千葉 田中 道江

月代や浄土庭園澄みわたり

すさまじや甕棺の底のぞきては

御朱印は詐欺退散や冬に入る

短日や皆上眼なる仁王像

霊窟へ冬日届ける法話かな

千葉 松浦 陵 保

小鳥来る僅かに残る保存林

老木の樹液に群るる虫の秋

放牧の牛との会話天高し

踏ん張つて風に乱れぬ花芒

出産の牛に備ふる今年藁

千葉 喜多恭 仁子

義弟来る葉付き泥付き大根下げ

改めてカラヤンを聴く夜長かな

乗り換への地下鉄遠し初時雨

やうやうに咲き初むる菊仏壇に

父恋ふる母想ふ夜の関東煮

千葉 大月 玲子

柿熟るる崩れしままの能登瓦

門口に「どうぞ」と置かれ花梨の実

窓硝子磨き秋天引き寄する

介護士の手のふつくらと冬ぬくし

落葉籠朝の湿りの永平寺

酒々井 竹 澤 竹 里

張り替へはアイロン掛けて冬障子

初時雨鐘馗の顔を洗ひたり

○浄め塩崩して白し初時雨

北風にひらひら蜻の姿干し  
銅鍋でぐつぐつ煮込むおでん種

佐倉 内海 保子

立冬のにはとり関を続けざま  
風荒き丘の高きを雁渡る  
湯豆腐に木曾の杉箸揃へたる  
○病よしおかはりをして根深汁  
煮凝の中にちぢみてたこの足

佐倉 大内 佐奈枝

○在りし日のままの庭下駄実むらさき  
顔ぶれの一人減りたり衣被  
色変へぬ松や叙勲を言祝げる  
底石の見ゆる流れや散紅葉  
次の風待ちて飛びさう草の絮  
蓮の実のとぶ頃背中痒くなる

佐倉 三屋 英俊

ゆつくりと雲が雲追ふ花野かな  
薄暮なほ野に粃殻を焼く煙  
地に落ちて木の実小躍り繰り返す  
身に入むや薬師の頬の火傷痕

影冴ゆる鑿あと荒き伐折羅像

佐倉 横川 良子

沖繩の基地はそのまま欣一忌  
立冬の沼に水漬きし舟の影  
ずぶずぶと雨に膨れし落葉道  
夕時雨寄らずに帰る佃煮屋  
整はぬ言葉繕ひ根深汁

四街道 奥 太雅

いほむしり大きな胎を引き摺れり  
前脚をたたみ蟻螂反り返る  
飼犬にかける一言秋深し  
門先に日の丸消ゆる文化の日  
蒼天へ飯桐の実の房数多

四街道 塗木 翠雲

秋天へパンパスグラス輝けり  
落栗を蹴飛し帰る下校の児  
サツチモの唄れ声や秋深む  
○行く秋を一人静かに逝かれけり  
牧閉す牧草ロール積み上げて

内藤忠子先生追悼

船橋 山下 良江

水面のビル影揺すかいつぶり  
冬干潟水面すれすれからす飛ぶ  
空に向き茎直立の石路の花  
一匹が潜れば次次かいつぶり  
立冬の日差しやはらか潟の風

船橋 赤堀 洋子

嘴いれてひよどり啜る庭の柿  
凍て柿の皮を残して鴨突く  
刈蘆の穂絮吹かるる池の縁  
びちびちとどんぐり踏んで夕日中  
洗濯物寄せて柿干す楽しさよ

船橋 久保村 淑子

木守柿鴉三羽のにらみ合ひ  
大輪を並べ香のなき菊花展  
頁繰る紙の影濃き夜長かな  
真鶉の影黄の色残し移りたり  
ひたひたと潮差す音や冬干潟

船橋 片桐 帆一

桃色の靴が片方草紅葉

山の子となりてあけびの蔓引けり  
立冬の空に宙吊り鉄パイプ  
蓼科の空青き日の冬帽子  
コーヒ―のむ冬日の窓に椅子を寄せ

船橋 宮本 加津代

生身魂大きな耳にして遠し  
リハビリの歩数の伸ぶる菊日和  
集めたる木の実の一つひよんの笛  
夕空へ舞ひつつほぐれ蒲の絮  
薄き日の塵浮びたる冬座敷

船橋 中嶋 久登

一步下り地獄のぞきや山粧ふ  
散りたての落葉ふはふは獣道  
朝霧や次第にビルの色もどる  
あでやかな焼酎瓶の秋珊瑚  
冬日向威嚇の猿の歯の白し

船橋 山本とく 江

沼晴れて蒼き空より冬に入る  
下枝より空まで黄葉づ落羽松  
野茨の実の赤赤とひっそりと

雪嶺の富士引き寄せて日本晴れ  
凜として彩尽したり冬薔薇

和 内 田 郁 代

壺に味噌継ぎ足してをり今朝の冬  
出来の良き柿に深深嘴のあと  
輝いて能登の新米炊き上がる  
金目鯛目玉ぎよろりと煮上げたり  
○池の面を転つて来る鳩の笛

和 古 川 京 子

十六夜や吾が脚さする娘の掌  
大の字になれる幸せ金木犀  
旅寝かな月の淡海に足を向け  
ヘルパーの声ほがらかに芋を煮る  
石路咲くやもう床上げをいそげよと

流 山 穂 苺 照 子

初鴨やまだ隊列を崩さずに  
沼杉の気根に絡む蔦紅葉  
摘み取りしコスモスに風ついてくる  
○引算の二人の暮し秋刀魚焼く  
長き夜や父を施設に置いて来て

東 京 名 和 政 代

漁火の点てんと揺れ小夜時雨  
岬ゆく一輛電車星冴ゆる  
祓はれてクレヨン貫ふ七五三  
荒磯に女ひとりの日向ほこ  
雉鳩の朝の落葉に沈みたり

東 京 藤 田 裕 子

○西郊にひとむら薄源義忌  
椿の葉濡るごとくに後の月  
天辺に親方の顔松手入  
立冬の夜更け半月皓皓と  
齒の抜けし少女の笑顔七五三祝  
いざ行かむお揃ひの杖冬帽子

東 京 島 野 ひ さ

ベランダの敷布踊らせ空つ風  
虎落笛ひとりほつちの留守居かな  
浮寝鳥一気に沼をせばめたる  
果てもなき空の青さや冬来る  
城北の森に一声冬鴉

東京 加賀 葉子

冬浪の白く寄せ来る夜の浜  
曇天の穴は青空大枯野  
草ゆれてゆれて颯のぬつと出で  
参道の左<sup>そ</sup>右<sup>う</sup>より祓ふ酉の市  
肅肅と作務禪寺の雪囲

東京 久留島 規子

木犀の香の強ければ雨兆す  
肩の荷をひとつ下して茸飯  
炉開の朱杯に受くる御酒すこし  
ペランダに三すじ四すじの吊し柿  
都庁より冬の房総見晴かす

東京 下 嶽 孝一

鳥渡る道すぢひかる能登瓦  
焼栗のはせて飛び出す国なまり  
語らひの帰路にふむ影冬の月  
バス停に寄り添ふ園児冬めける  
産院の庭をせばむる石路の花

東京 草間三 香子

崩落の裾に色濃き石路の花

大屋根のブルーシートや柿熟るる  
冬晴や昼月かかる雑木山  
前掛けを転り落つる背戸の柚子  
父母の墓を動かぬ枯蟻螂

東京 岡村 純子

モナリザに見られてゐたり冬うらら  
紅葉濃し目鼻失せたる観世音  
立冬や石より石へ池の亀  
竹林の木洩れ日優し冬桜  
故郷の一番ホーム冬夕焼

東京 桑原 優美子

冬めくやトーストに塗る小倉餡  
万の燭吊す境内西の市  
消しゴムはピーチの香り文化の日  
小さき手に小さき拍手七五三  
○初冬のモリソン書庫のうすあかり

東京 三村 紀子

墓の辺に猫の寝転ぶ小春かな  
池の面に触れんと漆紅葉燃ゆ  
石組に小さき流れや石路の花

一人づつ渡る石橋照紅葉  
冬灯お齒黒欠けし般若面

東京 小池 清晴

うすら寒声のうはずる選挙カー  
振袖の長さど競ふ千歳飴  
ぎんなんの鼻突く匂ひはにわ展  
○黙禱に始まる句会秋深し  
大熊手掲げ子供の手を引いて

東京 一由久 美子

ハロウィンやバスに幼き魔女ふたり  
神在の祝詞の声の透きとほる  
飴色を放つ提灯日短

冬ともし卓布に銀のカトラリー  
水鳥を押し上げてゐる鯉の背

武蔵野 砂地 宏子

朗読の声にうとうと文化の日  
林檎赤し母の自慢の真白き齒  
立冬の三日月しるし藍の空  
高層のビルの隙間の寒北斗  
北風に夜更けの窓の鳴りやまず

町田 広瀬 俊雄

防人の越えし峠や秋の風  
藤袴寝釈迦を囲む茶湯寺  
秋の日の童地藏の笑み優し  
土器を投ぐれば消ゆる紅葉溪  
大山寺の鉄不動うす紅葉

町田 桔 梗 純

○ハロウィン<sup>内藤恵子先生</sup>の星の一つとなられしか  
思ひ出の手紙とり出す文化の日  
大楠を訪うてひととき秋惜しむ  
茶の花のこぼるる庭や鳥高音  
冬晴へ弟を送り夫卒寿

日野 喜多尾 明子

行く秋の人形は目を見開きて  
庭弄り小春の日差しむさぼりて  
留守宅に庭師来てをり石露の花  
表掃く音の乾きも冬めける  
○取り出せるデブリの微小冬の雷

横浜 西本 才子

男ならふ袴の着付け文化の日



赤のまま挿せり益子の小さき壺  
山の端に夕日傾く蘆の花  
千歳飴ひきずり登る太鼓橋  
路地に入れば一面に長け草の花

横浜 大橋 雅子

伊勢山皇大神宮  
万葉歌の朗詠流れ薄紅葉  
地に低く舞ふしじみ蝶冬うらら  
銀杏の踏まれて匂ふ寺の坂  
焼芋の売り声団地巡りをり  
枯芙蓉触るれば黒き種零し

横浜 山崎 郁子

奥能登は寒鯡の季となりにけり  
キーキーと帷子川へ鴟高音  
冬日受け蜜柑の黄色強まりぬ  
加賀温泉外人多き年の暮  
色づきし稲田に案山子立ちゐたり

横浜 田賀 楳恵

連山に白き雲湧く冬日和  
山の神水の神ゐて紅葉山  
張り替へし障子に映る鳥の影

青空や小虫集る花八手  
冬の朝絞る煎茶の深みどり

横浜 三木 豊子

冬晴の空に尾を引く飛行機雲  
松手入手拭外し終りけり  
旅疲れデッキに仰ぐ流れ星  
裏木戸に長靴干され野分晴  
ちやんちやんこ目鼻うすれし辻地藏

横浜 星野 信子

名残の月褪せし手紙の主をらず  
流星の落ちて地球の震へかな  
大仏の薄目通草の口開く  
窓越しの足場を走る秋の風  
晩秋や腕にぷつすと注射針

川崎 新妻 奎子

書き出しに迷ふ手紙や初時雨  
冬耕の男時時独りごつ  
大根煮る昼の厨や雨催ひ  
がたがたと硝子戸開くる一葉忌  
冬晴の富士山が見たくてモノレール

川崎 大久保 進

靴先でもしやと突く虚栗  
雁行の町に夕餉の灯かな  
行き場無き災禍の瓦礫能登時雨  
骨董の手書きの値札花八手  
霜の夜の背に寝落ちの吾子の息

鎌倉 恒川 清爾

笑栗や弾けんばかり稚児の頬  
敗荷やパンダの去りし上野山  
○双葉町へ帰るてふ友冬帽子  
おだやかな埴輪の顔や冬ぬくし  
蒲団干す二階の窓に青き海

伊勢原 佐藤 和子

○山風に吹かれ蓑虫枯色に  
講宿の坪庭美男葛垂れ  
うす紅葉大山豆腐売切れと  
初冬のうすき日差しや合歓は実に  
短日の裏参道の瀬音かな

静岡 大村 峰子

冬すみれポストの裾の日溜りに

○今朝の冬逆さ回りの計の知らせ

浚渫の重機秋水掻き混ぜて  
手繰り寄す通草に空のついてくる  
松手入一服しては腕を組み

静岡 海野みち子

笹鳴や野良着のままの夕仕度  
水神を祀る祠に小鳥来る  
庭先に鶏頭赤き綾子の忌  
稲妻に庭かけ抜くる猫の鈴  
青空へ塔のごとくに花ユツカ

静岡 宮崎知恵美

瑠璃色に陽を集めたり臭木の実  
名を知らぬ虫の競演背戸の畑  
捨て畑の蜻蛉の国となりにけり  
鶴鶴に挨拶したり船着場  
焼栗の爆ぜるや爆ぜる香を広げ

静岡 望月 敏男

干稲に網を被せて仕事終ふ  
盆栽に木陰のありぬ文化の日  
秋澄むや大工の口に光る釘

玄関に結納の使者小鳥来る  
うつちやりや土俵の際の指の跡

静岡 藤原千代子

田から田へ朝日をすべる穴まどひ  
稲刈機止めてしまへり鼠の子  
連山の影近近と刈田原  
白萩や墓地に水湧くひと処  
鳶の輪の真下に句会文化の日

静岡 荻野加壽子

即興のドラムのリズム木の葉落つ  
薄月や聳えて暗きビルディング  
山の端に十一月の日の残り  
貼り替へし障子に夕日欣一忌  
○雨あひの鋭き日差し一葉忌

静岡 小川明美

鐘樓の裾にちちろの鳴きどほし  
独り居のぬるめの古酒と煮染かな  
秋蝶に薄目を開くる雌ライオン  
一頭となりし象舎や颯雲  
天高し象の転すドラム缶

静岡 藤本節子

鉄柵に食ひ付く駝鳥秋暑し  
はまごうの波際までの花野かな  
行き摺りに目礼交す秋彼岸  
銀杏の朽ちたる匂ひ拾ひけり  
霜降や圧力鍋の豆匂ふ

静岡 大長文昭

初冬の朝日の高くラジオ塔  
家中に母の匂ひや煮大根  
銚介の型染めの紅冬隣  
湯気の立つコーヒー碗や文化の日  
枯蓮や日矢はねかへす沼の面

静岡 加山ひさ子

焼き立ての魚に酸橘絞り切る  
入稿の済みたる夜や新走  
京の秋兎模様釘隠し  
深秋や幾度も読む子の手紙  
時雨るるや錆の浮きたるブリキ屋根

静岡 石川裕子

たつぷりの湯舟に浸かり文化の日

子に貰ふ草の指輪や小鳥来る  
付け直す喪服の釦十三夜  
みそ汁の豆腐きつちり今朝の冬  
我が耳に届かぬほどの冬の雨

静岡 本多ひとみ

○早十日我に留る風邪の神  
着ぶくれて鳶に餌付けの翁かな  
風呂吹や深く入れたる十文字  
小春日や子犬じやれ合ふドッグラン  
節樽の指に馴染まぬ革手套

静岡 杉澤 修

○高高と太刀魚かかげ夜の客  
稲刈の残り一列ねずみ出づ  
寄り添へる一村の墓冬すみれ  
冬ともし庫裡より洩るるジョンレノン  
冬薔薇や沈黙といふ意思表示  
並木道空を展げて櫛枯る

射水 成瀬真紀子

殉教碑囲める桜紅葉かな  
耶蘇谷へ半間の道すがれ虫

急啓に始まる手紙鵲高音  
青空へ波雲十段冬に入る  
○冬薔薇母留守の家の鍵回す

金沢 中條 陸子

にぎやかに女冬瓜切り分くる  
膝にのる猫と夜長を分ちたり  
鳩入れて釣瓶落しの神田川  
日没の黄落惜しみ欣一忌  
○待つことの安けし鳩を見てをれば  
満潮の蒼き河口や神無月

金沢 今越みち子

ナースと見る道長の見し望の月  
有難うと交す病室冬日満つ  
病窓に向き合ふ山の冬もみぢ  
撫林抜けて牧場や小六月  
立山や曲りくねりし枯野道

金沢 伊藤美音子

十三夜ひとりの音の厨ごと  
低音のクラリネットや星流れ  
花柵教会の鐘凜凜と

鴉来て落す四高の新松子  
松手入青き匂ひの風生る

金沢 高田たみ子

チエロの音に木の葉かつ散る新庁舎  
大拙の無の字おほらか花八手  
銀杏もみぢ空にとけ込む神の庭  
稽田の日ごと色づく散居村  
五箇山にあまねき日差し萱を刈る

金沢 豊田高子

白樺の黄葉日に照り風に照り  
断層の棚田へ飛べり波の花  
納棺へ尺八添ふる小六月  
地震あとの仮設住まひや葛湯吹く  
翁忌や近江の空の照り翳り

金沢 松井佐枝子

行く秋の螺旋階段軋む音  
冬の蜂堤の罅をうろろす  
枯山に砂防工事の音響く  
朴落葉日に異に白を深めたる  
はぐれ鷹大いなる円大空に

百幹の節競ひたる竹の春  
腰かがめ農婦の案山子動きさう

金沢 石川純子

串団子垂れたつぷりと冬隣  
芒原分け入る風のさんざめく  
烏瓜たぐり寄するもひとつきり

金沢 河野尚子

秋しぐれ一枚羽織る夕べかな  
日照雨止む戸隠古道水引草  
蕎麦切りの音の軽やか小鳥来る  
友の訃や色深めたる断腸花  
仁王門の草履にすがる秋の蜂

金沢 道場啓子

霜降やあたたため直す煮つころがし  
停留所未だ開かぬ石榴の実  
力身に宿しつ棗吹かれをり  
熟柿一つ投稿欄に馴染の名  
在りし日の友の喚声通草の実

金沢 杉本年虹

雲負へる医王連峰秋気澄む

刻告ぐる雄鶏の声ピラカンサ  
菩提子や地藏と並ぶ芭蕉句碑  
友とまた月の桂を見に行かむ  
一笑塚二つ置かるるくわりんの実

金沢 南 恵子

猫じやらし踏みつけ第一反抗期  
松茸やたつぷり能登の土付けて  
樹木医の幹に耳あて冬に入る  
夫の髪不揃ひに切る小春かな  
大根洗ふ山の日を背いつばいに

金沢 松下 信子

古酒酌むや切手収集今もなほ  
行く秋の空狭うして大櫂  
赤とんぼ散歩の圍児指を立て  
多羅葉に以呂波を刻み秋惜しむ  
来し方を十一月の空仰ぎ

金沢 北川 禮子

眉白き庖丁研師着ぶくれて  
抽斗に考の松茸送り状  
秋晴の飛鳥や仔山羊草を食む

葱畑抜けて入鹿の首塚へ  
菩提子の一笑塚へ転りぬ

内海 塩井 志津

空高し野外授業の声弾む  
廃屋の壁のはなやぎ蔦紅葉  
練り歩く潮鏑声や浦祭  
秋明菊たゆたふ父祖の墓ほとり  
沢鴛舞ふ疎林の奥の分教場

七尾 谷 渡末 枝

冬麗のひかり渦巻く河口堰  
種馬のふぐり湯気立つ今朝の霜  
○家を捨て田を捨て冬の来る前に  
雪ばんば重機の唸りひもすがら  
冬虹や近くて遠き珠洲輪島

津端 河原 昭子

両膝のてかる賓頭盧柿紅葉  
長き夜の灯消せば風の声  
木犀の盛りさいなむ今朝の雨  
父の忌の九谷小皿へ栗御飯  
地震に挽がれ片手の仁王そぞろ寒

敦賀 倉谷ます美

金風や桂の森へ踏み入れれば  
朝寒や木端ひろいて火をおこす  
柿すだれ潜りて軀便り受く  
○畑終へて夫の好物衣被  
人形の足を治して月明り

敦賀 鶴田勝子

峡の日の温みの残る柿すだれ  
恐竜の吼ゆる口より月上る  
鰯雲東尋坊に被さりぬ  
吾子が夢五指に語れる文化の日  
衣被病癒えたる食膳に

敦賀 中川雅月

朝寒や羽撃ちの音の鷺一羽  
御所柿の大木撓む若狭寺  
鰯雲茜に染むる衣裳幕  
○大木の花柵や鬼門守る  
神迎能登の社の崩れ垣

敦賀 中村優

衣脱げば乙女の肌の衣被

律の風指で操る変化球

指先に抜ける棘あり牛膝  
冬ざるる展望台に子連れ猿  
○籬を編む天秤押しの酸茎樽

敦賀 為永香月枝

余念なき旅の仕度や秋麗  
草紅葉わらじ穿きなる鯖街道  
色変へぬ氣比の松原潮騒ぐ  
酸茎売の声よく通る大原女  
消しゴムの落款押せる文化の日

大阪 入山繁幸

鰯雲一条よぎる飛行機雲  
飛鳥路の流れの音や稲架のかけ  
軽装の外国人や小春空  
反り橋のペンキの剝げや枯蓮  
帆船のシルエット濃し冬の午後

徳島 福島吉美

海桐の実弾ける岬恋の句碑  
稽田に風を起せり群れ雀  
桐箱に得度の髪や秋思濃き

酒肴浜に広がる浦祭

○丸め売る束子に似たる干し芋茎

徳島 村上 和義

綿菓子に頬を崩せり七五三

○基地を発つ機影を背に蓮根掘る

名利の床に煌めく夕紅葉

国生みの島と繋がる冬銀河

思ふより余生は長し日向ほこ

徳島 宮西 修一

真つ直ぐに行けば空港新松子

下乗橋渡れば桜紅葉かな

下り築小枝の絡む洗ひ堰

松手入父の遺愛の鉄錆ぶ

麻酔より醒めてこの世や秋の昼

徳島 平岡 功

父あらば里山の栗届く頃

喧騒にゐてなほ孤独秋の暮

○奥祖谷の縄で結べる新豆腐

校長も担ぎ手となる秋祭

水澄むや倒影美しき金閣寺

石井 木内 マヤ

散弾のごとく御空へ稲雀

こはごはと松茸磨く濡れ布巾

○秋来るぐいつと空を持ち上げて

娘との再会勤労感謝の日

阿波に来るミッキー踊る十二月

小松島 岡田 あゆみ

海光をまとふ一艘秋うらら

鮑屑転してくる秋の風

愛の羽根回覧板に付いてくる

木洩れ日を受けて艶めく臭木の実

狼煙場の粗き石垣萩戦ぐ

福岡 宮田 千恵子

銀杏の落つる間際の迅さかな

大しやもじ天地を反す茸飯

八十路まで真すぐ生きて月見酒

からつぽの納屋に秋日のすべりこみ

秋深し夕日に染る忘れ潮

長崎 丸本 祥夫

唐寺に夕日の沈む蘇鉄の実



花カンナ風に炎の如く燃ゆ  
碧眼の気合発するくんちかな  
○牛蒡引く大地と共に香り引く  
選別を終へ立て掛くる濃竜胆

西海 山下 敦子

ラム入りのチョコの銀紙剥ぐ秋夜  
山また山尖れる空を秋の風  
雨粒をそれぞれに載せ花野かな  
○太刀魚を捌けばわが手光りたり  
有明の月に火星と木星と

宮崎 中山 宣

ひしかびと  
日向人として迎へられ秋佳き日  
爽やかや胸のときめくグレイヘア  
蒲団干すホームステイの医学生  
一杯の熱燗に酔ふ深眠り  
砂浜の楽書消しゆく冬の波

宮崎 中山 芳教

岩棚にくもはぜ遊ぶ潮溜り  
新米の幟はためく停留所  
イニシャルを消しゆく静寂秋の波

青島 二句  
神の留守洗濯岩を波洗ふ  
檳榔樹の茂る島なり秋高く

宮崎 鳥居 達史

風化せる掩体壕や鷓猛る  
牡蠣鍋を囲めば盛る国ことば  
切干の筵を越えて回覧板  
どんぐりの小屋根に遊ぶ弟の忌  
藪庭の水瓶あたり冬の虫

那覇 中本 清

丈なせる芒海光あふれしむ  
色鳥の羽音のなかや流人墓  
新松子落人墓の文字うすれ  
○一鷹の声失へる虚空かな  
友の忌の榼は紅葉をつくしたり

西原 宮城 勉

迎へ待つ窓の園児に芙蓉閉づ  
玉と抱く曾孫・さら白妙の稚眼のさやか  
身に入むや天に触れむと慰霊塔  
行く秋の朱漆深き観世音  
○秋深く祈る容の独りの餉

尊見城 渡 真利 真澄

新札の早も手擦れて十三夜  
色鳥の声の膨む大榕樹  
冬日とはならぬ日差しや鳩溜り  
朝市や露けき草を踏み固め  
泥池の縁より枯の始まれり

（ベル） 鈴 木 波 江

小春日やごみを捨つるに猫連れて  
教会にバザーの掲示銀杏散る  
○神の留守鍋の煮物を撮み喰ひ  
友も吾も独り暮しやおでん鍋  
聖マルチン祭の子らゆく着膨れて

### 万象基金のご報告

菰原美穂子 様 (栃木) 六・五口  
伊藤美音子 様 (石川) 一〇口  
光岡れい子 様 (栃木) 六・五口

(令和6年10月1日、11月末日・受付順)

「万象」の発展のため、大切に使わせて頂きます。

万象俳句会

## 思い出す人々

西山 厚 全24回

### 第24回【ゆり】

最終回になった。

俳句の話でなくても言われてお引き受けしたが、  
関係ない話ばかりでは申し訳ないので、俳句・短歌・  
詩・そのほかの4分野を6回ずつ書くことにした。題  
は「思い出す言葉」のほうがいいがよかつたかもしれない。  
父が短歌、母が俳句をつくり、兄が詩を書いていた  
が、私は何もしなかつた。中学生の時に授業で俳句を  
つくり、それが何かの特選になってしまったが、それ  
以来、俳句はつくっていない。

学生時代には、短歌をつくり詩も書いたが、すぐに  
やめて、「詩を書かない詩人」と呼ばれた。

定型には、いつもとは違う衣装を身につけるような  
気恥ずかしさがあり、それが苦手なのだろう。詩にも  
同じような羞恥を感じる。とは言え、五七五(七七)  
のリズムは体とも心とも不可分の関係になっている。  
好きな句は？と尋ねられたら「くろがねの秋の風鈴  
鳴りにけり」と「紅さえて触れて見たさの寒椿」を迷  
いなくあげるが、これも好きだ。思い出す人がいる。

ひとすじに百合はうつむくばかりなり

公益社団法人俳句協会

同人会だより

同人名簿についてのお願

「令和7年版 万象同人名簿」（令和7年4月1日現在）の作成に着手しております。

つきましては、お手許の「令和6年版 万象同人名簿」記載の同人の住所、電話番号、メールアドレス等に誤りや変更がある場合、また「万象」句会一覧については「万象」誌令和6年12月号掲載の一覧表に変更のある場合は、令和7年2月末までに同人会事務局・大久保進までご連絡頂くようお願いいたします。

また、個人のメールアドレスをお持ちの方は出来るだけ登録をお願いいたします。大久保進にメールでご連絡下さい。

変更や登録のご連絡がない場合、令和6年版の記載を踏襲することになりますのでご了承下さい。

なお、「令和7年版 万象同人名簿」は4月上旬の配送を予定しております。

皆さまのご理解とご協力のほどお願いいたします。

【連絡先 同人会事務局 大久保進】

電話 番号 044-3333-1054  
 メールアドレス f.w.k.x0296@nifty.com

同人会事務局

12月の「万象」オンライン同人句会高点句

- |    |                    |       |    |        |
|----|--------------------|-------|----|--------|
| 17 | 手をにぎるだけの面会石露の花     | 穂苺    | 照子 | (流山)   |
| 11 | 雑踏へひとりになりゆく小春      | 桑原優美子 |    | (東京)   |
| 6  | じやんけんの人左手冬ぬくし      | 神田美穂子 |    | (富士)   |
| 5  | 凧や沼はさざ波かたくして       | 穂苺    | 照子 | (流山)   |
|    | ていねいに夕日をしまふ冬の海     | 山本    | 右近 | (さいたま) |
| 4  | 神棚の裏にへそくり神の留守      | 恒川    | 清爾 | (鎌倉)   |
|    | わがままに生きて長生きちやんちやんこ | 清水英理子 |    | (金沢)   |
| 3  | 針刺に縫針もどす一葉忌        | 沢辺たけし |    | (流山)   |
|    | 兄の星姉の星あり冬銀河        | 平岡    | 功  | (徳島)   |
|    | 色消えて落葉に音の生れけり      | 穂苺    | 照子 | (流山)   |
|    | 手仕事や指の先より冬来る       | 下嶽    | 孝一 | (東京)   |
|    | 那谷寺や詩篇のごとく紅葉散る     | 中條    | 睦子 | (金沢)   |
|    | 沖の船見てゐるだけの日向ほこ     | 村上    | 和義 | (徳島)   |
|    | 生き物の気配かすかに池涸るる     | 紅露    | 恵子 | (札幌)   |
|    | 帰る子に鍋ごと持たすおでんかな    | 佐藤    | 和子 | (伊勢原)  |
|    | 猪の寝床木の葉の吹き溜り       | 谷渡    | 末枝 | (七尾)   |
|    | 散り急ぐ紅葉一片憂国忌        | 大久保   | 進  | (川崎)   |
|    | すり鉢を抱へ胡坐のとろろ汁      | 中鉢    | 弘一 | (札幌)   |
|    | 泡吹きてつぶやく能登のずわい蟹    | 下嶽    | 孝一 | (東京)   |
|    | 野晒しの石棺二つしぐれけり      | 柳澤    | 宗正 | (横浜)   |

( \* 句頭の数字は点数を示しています )

# 同人作品の佳句

江見悦子

風木舎朴の枯葉の乾ぶ音 瀨谷和代

瀨谷さんは、風木舎を訪問されたことがあるのだろう。沢木欣一、細見綾子両先生のお住まいであり、昭和31年から「風」が終刊した平成14年まで、「風」の発行所として多くの人人を育み励まし続けた場所である。武蔵野の一面にあつたそれは「風木舎」の名にふさわしく、玄関入口の朴の木が四季の移り変わりを告げていた。晩秋には枯葉がからからと乾いた音を立てる情景を、作者は感慨深く思ひ出している。

夕日截り川波切りて鴨の五羽 増田幸子

「夕日截り川波切り」のリフレインが成功した。「截る」の意は「たちきる」とあり、広く使われる「切る」の意味よりも強い。夕日を裂いて川に向かう鴨五羽の速さと、川に着水して波を立てせる情景を的確に描写している。

病よしおかはりをして根深汁 内海保子

「根深汁」を「おかはり」しているのは、内海良太名譽主宰。いつもの味噌を溶いて、椀にたっぷり湯気の立つ根深汁を注ぐのは奥様の保子さん。千葉県名産の「矢切ねぎ」かもしれませぬ。「病よし」にはっとしました。どうぞゆっくりと療養なさいますように。

在りし日のままの庭下駄実むらさき 大内佐奈枝

親しく行き来していた方が亡くなった。庭には愛用の庭下駄がそのまま残されている。指あとがつき、齒が磨り減つた下駄だろうか。紫式部が実をつけ、供花のように枝を垂れている。「庭下駄」と「実むらさき」の取合せが心に沁み入る。

西郊にひとむら薄源義忌 藤田裕子

「西郊」とは都市の西の郊外の意。「源義忌」は、角川源義の忌日で10月27日。昭和期の出版人、俳人、国文学者、角川書店創立者として知られる。東京の西郊と言える杉並区に、区立公園として旧宅「幻戲山房」と庭が公開されている。芝生が広がって小径を辿れば四季折折の木や草花が楽しめる。作者は群がって花穂を伸ばしている薄を目に留めたのだろうか。庭の縁に映える薄、「ひとむら薄」がこの句の眼目で季語。

初冬のモリソン書庫のうすあかり 桑原優美子

東京都文京区にある東洋文庫は、三菱の三代目社長岩崎久彌氏がモリソンの蔵書を購入したことに始まる東洋学研究の施設。ミュージアムが開館して貴重な資料を目にすることが出来るようになった。圧巻は「モリソン書庫」。ロンドン・タイムズ特派員のG・E・モリソンが収集した、中国を中心としたアジアに関する書籍や絵画、何と2万4千点が、部屋の三方を占める巨大な本棚に収められている。

この部屋を訪れた作者は、書庫を「うすあかり」の中で捉えた。天井や足元からの照明では照らしきれない膨大な知の集積の前にたたずんだ、作者の実感であるに違いない。

取り出せるデブリの微小冬の雷 喜多尾明子

去年の11月、福島第一原発2号機で初めて核燃料デブリが取り出された。量は0・7グラム。まさに「微小」である。今後何年あればデブリを回収し廃炉にできるのか、途方もない年月がかかるのではないか。「冬の雷」が暗く不気味だ。事実を直叙することで社会的な課題を炙り出し、その重さを再認識した作者は、焦燥感と不安感を募らせている。

双葉町へ帰るてふ友冬帽子 恒川清爾

双葉町は、東日本大震災に伴う福島第一原発事故でほぼ全町が「帰還困難地域」に指定された町。ようやく2年半前に避難指示が解除された。作者の友人は町へ帰ることを決めたという。様様に考えての決断なのだろうが、何を話したらよいのか、餞の言葉が出てこない作者。冬帽子の後ろ姿が切ない。

雨あひの鋭き日差し一葉忌 萩野加壽子

「一葉忌」は樋口一葉の忌日で11月23日。兄と父の死後戸主となり、困窮生活の中で、小説家として家計を支えて行くとした。22歳で「おおつこもり」を発表後「たけくらべ」で一気に文名を上げ、14か月間に11作の小説を発表した。作者の萩野さんはこの「奇跡の14か月」を、「雨あひの鋭き日差し」に事寄せて表現し、24歳という若さで逝った一葉の天与の才を惜しんでいる。取合せの妙である。

高高と太刀魚かかげ夜の客 杉澤 修

季語は「太刀魚」。平たく細長い魚で長さは1・5mにも及ぶ。銀灰色で文字通り太刀のような形だ。今日の釣果の太刀魚を頭上に掲げ意気揚揚とやって来た「夜の客」。灯にき

らめく銀色も目に浮ぶ。太刀魚というモノを焦点に、動きのある、明るく愉快な場面をリズムよく表現した。

待つことの安けし鳩を見てをれば 中條睦子

中七で切れる句またがりの句。池か沼か、潜ってしばらくして遠くの水面に姿を現す鳩を、飽きずに見ている作者。その時間が少しも苦にならない。友人を待っているのか、或いは人ではない何かを待っているのかもしれない。日常を離れた場で、「鳩」の姿に誘発されて生まれた心の平安を詠んだ。

丸め売る束子に似たる干し芋莖 福島吉美

「芋莖」は里芋の莖のこと。茹でて酢味噌で和えたり、干して乾燥したものは水で戻して煮つけたり、汁の実としたりする。莖は長く1m以上にもなる。この句「束子に似たる」とは、まさに主婦の観察眼。寺の接待用に、作者は「束子」を沢山仕入れた事だろう。俳味たっぷりの句。

秋来るぐいつと空を持ち上げて 木内マヤ

菌切れよく若若しい句。高高と澄んだ空が秋の空、作者はそんな季節の到来を「ぐいつと空を持ち上げて」と詠んだ。「持ち上げ」るのは造化の神、作者は新しい季節を勇んで迎えている。「ぐいつと」が実感。

神の留守鍋の煮物を撮み喰ひ 鈴木波江

陰曆10月、諸国の神神が出雲へ旅立ち、本居の社を留守にするという「神の留守」、この季語をベルリン在住の作者が使ったことが面白い。お目付け役が出かけている間に、美味しく仕上がった「鍋の煮物を撮み食ひ」という可笑しみ、俳諧味のある一句となった。

# 寒を生く

荻野加壽子

午後の日古びて来り雪螢  
 思ひ出したるやうに切干戻りけり  
 カルトンを立て掛く苑の一冬木  
 一枚の闇の重さや梟啼く  
 寒林の行間を読む月明り  
 三日月も我も一人や寒を生く  
 凍蝶の付箋のごとく止まれり  
 生まれ出て幾度ころぶ寒卵  
 抽斗の奥のくらやみ久女の忌  
 水陰に音の生まるる寒の明



温暖と言われて来た静岡市、昨今の異常気象で今年も猛暑となった（二度も日本一）。そして短い秋は堪能する間もなく冬に。この様に季節感の薄れは如何ともし難いが「俳句の眼」で過ごしていると日日の変化に敏感になり、新しい発見がまだこんなに溢れていたのかと驚いてしまう。

今回の十句は遠出をせず  
 に詠んでみた。肉体の老いは仕方ないが感性は老けさせたくないと思っている。  
 もうすぐ春。「俳句の眼」で出会いを楽しみたい。

## 北の大地 入山 繁幸

鋏形虫貫ひこはごは手の平に  
大花野駆けパラグライダー離陸  
鳥渡る役目を終へしトラクター  
新蕎麦を捏ぬる羊蹄山の水  
稔り田や屯田兵の拓きし地  
コスモスの小径馬の背にことごと  
夕霧や灯りに樺の幹白し  
満載の唐黍北の大地行く  
花畑の「どこでもドア」賑ひて  
熱気球バーナー音と秋空へ



北の大地と呼ばれる北海道、日本の他の場所では見られない特異な土地。農場も牧場も広大、植生も針葉樹を中心に異国情緒に溢れている。

カナダから帰国した秋に初めて訪れた時、そこは黄葉したカナダの様相そのものであった。午後の日の低さ、影の長さ、樹木などは北国特有の景色で、カナダでの日日を思い起こさせた。梅雨のない夏は爽やかな季節を迎える由。しかし近年、気候が大分変わってきたという。この土地の気候と風土を大事に守ってゆきたい。

馬鈴薯の花

大村かし子

栃木県・芳賀町在住の大村かし子さんは、俳句は心の支えであり、日常の出来事を俳句に詠み綴る日記替りでもあると米寿の今も句会参加を続けられ、句友の励ましと送迎を感謝していると言われる。今回は家の周辺で発見した自然豊かな田園風景に喜びを感じて句を詠んだ。

朝焼やつちくれ鳩の声止まぬ

朝焼は夏の季語で天気は下り坂になるといふ。つちくれ鳩はキジバトの異名で、鳩が朝鳴くのは巣作りか繁殖のためといふ。作者は敷地内に巣作りする鳩を見た。

一村を丸ごと包む大夕焼

夕焼は夏の季語で翌日は晴天になる事が多いといふ。作者は気宇壮大に一村を丸ごと包むと詠んだ。大夕焼に包まれて作者は明日の幸せをいろいろと考えている。

馬鈴薯の花の真白や夕映ゆる

馬鈴薯の花は6月頃白または淡紫色の五弁の花をつける。作者は畑一面に咲く白い花が夕日に映えるのを見た。花咲けば無駄花の無し茄子の花

作者は「茄子の花は千に一つも無駄はない」の格言をふまえ、茄子の花が咲き実を付ける事を喜んでる。

干瓢干す雲一つなき遠筑波

干瓢は夕顔の果肉を細く長く剥いて乾燥させたもので栃木県が主たる産地である。剥かれた干瓢がひらひらと夏空に舞う光景が見られる。作者は干された干瓢が風に舞う光景を見てその風の向うに遠く筑波山を望んだ。

生身魂

宮西修一

徳島市在住の宮西修一さんは沢山の句に接し、その選評を読むのを楽しみにしていると云われる。また自分の句が思わぬ方向に解釈されるのも楽しいと言ふ。徳島市の中央部を流れる吉野川には多数の橋が架けられており、眉山山頂からは淡路島・紀伊半島が望めるといふ。作者は今回、生身魂を句題に家族の親近感を句に展開された。

毎朝を鏡に立てり生身魂

作者は生身魂が誰であるか明らかにしてないが、作者が昭和16年生まれであるからかなりの年配者である。毎朝鏡の前に立ち、しっかりとしたお元氣な姿が窺える。

肉が好きジャズがまた好き生身魂

高齢者にとつて肉を食べることは元氣の源である。アメリカで生まれたジャズは戦後の日本そのものである。

根つからの巨人ファンや生身魂

高度経済成長期の巨人軍9連覇等昭和年代には巨人ファンが多く、日本全体に活気があり元氣だった。生身魂もいつまでも元氣でいて欲しいと作者は願っている。

我が齢をいふ口癖の生身魂

医者や看護師は高齢者の正常な意識確認のため年齢を問うが、筆者の母も大正生まれの生年月日を百歳超えてもいつもすらすら口に出していた。生身魂は健在である。

墓洗ふはらから五人八十路過ぐ

長命のご家族である。家族5人が80代である。生身魂は秋の季語で「敬うべき年長者を一族が祝う」事である。



会員・同人の皆様へ

2月は「万象俳句会年会費」の「納入月」です  
ご理解とご協力を宜しくお願い致します

- ① 万象俳句会の会計年度は、4月1日～翌年3月31日です。振込用紙は、毎年万象誌2月号に挿入しています。
- ② 振込用紙を紛失された場合は、郵便局備付けの振込用紙をご利用下さい。
- ③ 振込みは郵便局窓口、又はATMからお願い致します。
- ④ 振込み締切日は2月末日です。2月末日までに振込みをお願い致します。
- ⑤ 2月末日までに振込みが無い場合は、4月号以降の万象誌配本を停止させて頂きます。
- ⑥ 振込先は、郵貯振替口座番号【00230-0-103581】  
口座名「万象俳句会」です。
- ⑦ 会費は、前納制で一年分をまとめて振込みをお願い致します。
- ⑧ 金額は、  
一般会員 一、二、〇〇〇円です。  
同人会員 二、四、〇〇〇円と同人会費五、〇〇〇円の  
合計二、九、〇〇〇円です。
- ⑨ 振込み頂いた会費は、原則として返金致しません。
- ⑩ 振込用紙の半券(控)を「領収書」と致しますので、大切に保管をお願い致します。
- ⑪ 振込手数料は「ご本人」負担とさせて頂いております。
- ⑫ 同人会費(五、〇〇〇円)は、後日、同人会会計口座へ  
纏めて振替えます。

万象俳句会 会計担当 松浦 陵保  
万象同人会 会計担当 大久保 進

毎月25日発売  
定価1000円(税込)

月刊 **俳句界** 2025年 2月号

特集

芸術としての俳句

- 俳句の芸術性とは何か 北村純一
- 芭蕉俳句の芸術性 復本一郎
- 私が思う俳句の芸術性
- 筑紫磐井 千葉皓史 依田善朗
- 上田日差し 恩田侑布子
- 池田瑠那 岩田奎

クラヒン 俳句界NOW 高橋健文

特集 人生の苦難と共に

俳句の力

- 小倉蒼蛙 伊藤伊那男 小杉伸一路
- 村上喜代子 國田欽也 佐藤成之
- 兼久ちわき

隔月連載



若手句集  
を読む①

- 相子智恵
- 坂井諒一
- 堀田季何
- (司) 井上泰至

発表！ 第15回北斗賞 選評 受賞の言葉ほか

【注目の句集】 松本勇二『風の民』

連載 宮坂静生 青木亮人 栗林 浩 坂口昌弘 ほか

「俳句界」投稿欄 一流選者11名！  
充実の投稿欄

※一部変更の可能性あります。



株式会社 森の文学

お求めは… ●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2 田島ビル8F  
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

## 子規と私(一)

## 細見綾子

私の師であった松瀬青々は、大変正岡子規の崇拜者でありました。ひとところは子規の要請で、「ホトトギス」の編集を手伝いに東京へいらしたこともありです。

私が青々を知ったのは、昭和の七、八年ごろですから、もうそのときは、ちゃんと大阪で「倦鳥けんちょう」という雑誌を出していました。「倦鳥」っておもしろい字ですけど、鳥は倦うんでもなお飛ぶっていう、唐か何かの有名な漢詩の文句だそうです。鳥は倦うんでもなお飛ぶ、そういうことを青々がモットーにしています。青々先生がおられるときは、大和の法隆寺で子規忌というのが非常に厳重に行われたんです。

私が「倦鳥」に参加したころは必ず九月十九日に子規忌を行いました。あんな荘重な子規忌はいまはないだろうと私は思うんですけれども、大阪や、それから河内、京都、伊賀の上野からも多くの俳人が集まってきました。毎年同じ人が、ちゃんと縫紋をした羽織を着て、袴はかまをはいて出席しました。五、六十人も集まったと思うんです。

子規忌は、経文の説明なんかする研修場みたいなところで開かれました。いつでも雨が降りまして、私もちゃ

んと袂たもとの着物を着て、コートを着て、雨傘をさして、その道を行つたことを覚えています。萩が乱れ咲いてしまして、その萩が揺れると着物の裾が濡れ、困ったことも覚えていています。

そこで、まず法要があつて、法隆寺の管長さんの佐伯さんが、まず読経をして、それからしばらくして講話があつて、それがすむと句会でした。

佐伯さんという方は、何の銜むらもない、とても立派な方でした。その人が何を話したか、私も六回も七回も行って忘れてしまったけれども、子規居士、子規居士ということを頻繁ひんぱんに口にされまして、そして、へ柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺へ、よほどこの句が佐伯さんに嬉しかったとみえて、へ柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺へと、その句を何回もおっしゃつたことを覚えております。

その子規忌を懐かしく思います。

そこで東京の根岸の子規庵に時々まゐりますが、そこでいま子規忌をやっているのかどうか知りません。いま、どこで、子規忌をやっているのか、みな皆自分の雑誌のことに一生懸命になつていて、子規の思い出話をするなんてことをやっていないんじゃないかなあ。少し調べてみなきゃならぬと、私、思っています。

(次号につづく)

# 『万葉集』にたずねる抒情の源流 ⑱

橋本 清

桜田へ 鶴鳴き渡る

年魚市潟 潮干にけらし 鶴鳴き渡る (三二七二)

「桜田の方へ鶴が鳴きながら飛んで行く。年魚市潟は潮が引いてしまつたらしい。ああ、鶴が鳴きながら飛んで行くよ。」

高市黒人の旅の歌です。「桜田」は名古屋市南区に桜台・元桜田町などの町名となつて残つてゐる辺り。「年魚市潟」も同じく名古屋市南区辺りにあつた干潟。同区には鶴里・鶴田などの町名も見えます。

潮の引いた潟から鶴が桜田の方へ向かつて群れをなし、先を争うように甲高い声を上げて飛んでゆく。数多くの生きものが一斉に活動することによつて発散されるエネルギーを全身で受けとめてゐるといつた感じですが、胸が躍り、じつとしていらなくなつてくる。「鶴鳴き渡る」を結局で繰り返して、その感動を更に強く訴へてゐます。

こうした全身が揺さぶられるような感動を詠んだ例を他に挙げるなら、先ずは「梁塵秘抄」の一編を挙げたい。本書は平安末期に成立した、後白河法皇の撰による、当時の流行歌謡（今様）を集めたもの。

遊びをせんとや生まれけん 戯れせんとや生まれけん  
遊ぶ子どもの声聞けば わが身さへこそ揺るがるれ  
路地か空き地で大勢の子どもが遊んでいる。昭和の半ば頃までよく見られた光景です。何が面白いのか、にぎやかに遊び戯れる声を聞いていると、自分の体まで揺さぶられ、思わず躍り出しそうになるといふのです。

次に挙げる与謝野晶子の歌も、何百頭もの若駒の躍動する光景に心を奪われています。「耳吹かれけり」、「ここが眼目で、若駒の生き生きとした姿をとらえています。生を写すという意味の写生になつてゐるところ。

夏のかぜ山よりきたり

三百の牧の若馬耳吹かれけり (舞姫) 明治三九年

山口誓子にこんな句があります。

唐太の天ぞ垂れたり 鍊群来

(凍港) 昭和七年

雲が低く垂れこめた冬空の下、産卵のため北国の海岸に命の限りを尽くして押し寄せる鍊。海の色が変わるほどの魚群が発散するエネルギーに身も心も揺さぶられるような感動を覚えているのです。

北原白秋門下の宮柵二にはこんな歌があります。

日蔭より日の照る方に

群鶏の数多き脚步みてゆくも (群鶏) 昭和二一年

生けるものの杜観な生の営みが見ている者の実存を圧倒するかのようです。

## 倉谷紫龍句集『群青の湖』に寄せて

敦賀の倉谷紫龍さんが句集『群青の湖』を上梓された。平成18年「万象」に入会されてからの330句が収められている。心からお祝いしたい。

27年に奥様のます美さんと揃って同人となられて以来、先進の方向が耕して来た風土を継ぎ、各種の俳句大会等の運営に尽されてきたことに感謝申し上げます。

紫龍さんの句の特徴は、「対象を物に即して的確に把握し具体的に表現している」ところにあると思う。「群羊の背に百条の初日差す」(牡蛎舟の吃水下げて戻りけり)「いずれも同人になってからの作品だが、次のような句もある。(淡雪や廓はづれの思案橋)の風情、(夜を徹す踊り下駄屋の賑はへり)〈大津絵の鬼が飛び出す春の雷〉の俳諧味。今や、軽味へとつながる境地の深まりを感じる。体調を崩し一線を退くことにした、とあとがきに書かれているが、それも紫龍さんの美学であろうと思う。これからは俳句で培われた感性を大切に、ゆっくりと過ごされて欲しい。



若狭湾の「群青の湖」  
を心に抱きながら。

(江見悦子)

## 沈鐘の海へ迫り出す崖桜

(125)

この度倉谷紫龍さんから句集『群青の湖』を頂いた。紫龍さんは敦賀俳句作家協会の役員をされていたので、協会主催の俳句大会ではいつもお世話になった。頂いた句集を開くと花換祭俳句大会、「奥の細道」敦賀芭蕉紀行全国俳句大会、福井県春季俳句大会、県総合俳句大会など、平成20年以降の大会で知事賞をはじめ、数多く受賞の経歴が記されている。

掲句は花換祭俳句大会の吟行地である金ヶ崎で詠まれた比較的初期の句である。「沈鐘」は南北朝時代の南朝軍が北朝軍に攻め落とされる際に、新田義頭が海に沈めた陣鐘と言われている。芭蕉が「おくのほそ道」の旅で、「月いづこ鐘は沈るうみのそこ」と詠んでおり、金前寺の境内に句碑となつて、鐘塚と呼ばれている。

金ヶ崎は当地の桜の名所であり、桜の小枝を交換しあう口マンに満ちた花換祭でにぎわう岬である。この歴史のある岬の桜が、崖から青々とした海へ張り出し、見事に咲いている様子を「海へ迫り出す崖桜」と詠むことにより、史跡である金ヶ崎の歴史の重みを句に託されたのであろう。教育者の要職におられた紫龍さんの実直なお人柄をうかがうことが出来る、史跡・金ヶ崎にふさわしい佳句である。

(中者正機 「鶴」同人)

## 産小屋に生れし荒男の鱈漁

(63)

敦賀半島の海岸の村に、昭和40年頃まで妊婦が産気づくと産小屋に入り出産する風習が見られた。産小屋に下がっている太い網にすがり苦痛をしのいだ。力み網である。

色ヶ浜集落には山際に産小屋を移築し、今でも有形民俗文化財として残されている。この産小屋で一人の男の子が生まれ、今では勇猛果敢な漁師となり、広い海原に向かつて鱈漁に船を走らせている。鱈は出世魚とも言われている。

掲句は「産小屋に生れし荒男の」とたたみかけて、鱈漁という大きな季語によく響いている。十七音の中に一人の男の人生が見えるようである。

色ヶ浜は芭蕉が「おくのほそ道」で訪れた所でもある。

## つるし柿燻して映の煙らしぬ

(38)

福井県南越前町の今庄では、長良柿という品種を薪を燃やした煙で燻す、日本で唯一の製法で吊し柿が作られている。

小屋に燻し部屋を作り、吊し柿を五日から七日間程燻します。この間、煙突から煙が峽に広がってゆく。「煙らしぬ」に余情が感じられる即物具象の写生句である。

氏は温厚な方で、長年にわたり教育や公の仕事に尽くされた功績により、平成26年に瑞宝双光章を受賞されている。

(雷田勝子)

## 饅餅焼く松の榎火のあかあかと

(118)

紫龍さんが住んでおられる町内の神社に、380年以上前から続く奇祭がある。毎年11月20日に行われる「せんべい焼」である。夕方から神事が執り行われ、境内に組まれた榎木に火をつける。暗闇に炎が赤赤と立ち上がり、松の榎木が爆ぜると火の粉が舞う。参拝者が、3メートルほどの青竹の先に、米粉で作った饅餅を挟み御神火で焼いて食べる。無病息災、家内安全のご利益があると伝えられる。掲句からは、榎火を囲む人人の顔もあかあかと、厳しい冬の到来を受け止めているのが読み取れる。

## 鯖街道葛根床几に乾きをり

(166)

若狭の国小浜から熊川宿を経由し、京都へと続く道を「鯖街道」と呼ぶ。古代、塩で締めた若狭の鯖を丸一日かけて街道を運んだ。熊川宿は、その交易の拠点として発展した。熊川の特産品に「くず」がある。原料である葛根を砕き、清流で繰り返し晒すことで不純物を取り除き、寒風で自然乾燥させると良質な澱粉となる。掲句は、掘り出した葛根を床几に並べて乾かせている景である。文化と自然に恵まれた熊川宿は当時の面影を残し、ゆったりとした時間が流れている。多くの人を惹きつける句材の宝庫である。ぜひ一度お訪ねを。

(中村優)



# 万象ノオト

## テーマ「図書館」



### 古代の図書館

町田 広瀬俊雄

図書館の価値は蔵書の質や量にあるのだから、私にはそれを云云する資格は無い。エジプトのアレキサンドリアにあった図書館の話を思い出した。

古代ギリシャのアレキサンダー大帝ゆかりの地に、紀元前3世紀頃プロレマイオス朝のエジプト国王によって大図書館が設置されたという。しかし紀元前48年のカエサル の戦役で大部分が焼失した。1500年後の2001年、新アレクサンドリア図書館が再建された。写真で見ると巨大な円柱が斜めに切取られて、地面から突き出たような奇抜なデザインとなっているのは驚いた。

### 近くの図書館

柏 村田由美子

柏市南部、自宅から徒歩30分の所に地域活動の拠点である「ふれあいプラザ」が2020年にリノベーションされました。柏市の支所、図書館、会議室、音楽室、ダンス室、ステージ、キッチン等が完備されています。

中でも図書館の広さと明るさが気に入りました。日曜日、祝日など明るい窓際に、親子連れ等の微笑ましい光景に出会うことがあります。

以前、名督主宰の「青嶺」を是非手に取ってゆつくり鑑賞したいと思いき、クエストしたところ、佐倉市から取り寄せてくださいました。「万象」誌にお薦めの本が紹介されると真っ先にリクエストしています。

図書館の裏手は公園で、コロナ前までは毎年行われた夏祭り。19町会のテントに和太鼓。町会ごとの揃いの浴衣で輪踊り。今では懐しい思い出です。

### 図書館にて

掛川 鈴木美由紀

来週は小学5年生の読み聞かせ。秋を感じさせられる絵本はどれがよいか探し始めた。司書さんに、高学年には漢字のある本を選ぶとよいと教わったが、私は背表紙の題名を漁るのが精一杯で焦点を絞れずに困っていた。

すると、参考までにと司書さんが数冊抱えてきた。その中から一冊、「話には秋らしい物は出てきませんが」と前置きして、頁をめくり見せてくれた。

大昔、自然は色に溢れていた。しかし動物たちはほんやりくすんでいた。見かねた絵描きが動物たちを呼び集め、似合う色や模様を付けていくという話。秋の風物は登場しないものの、紙面に繰り広げられる絵描きの活躍こそ、まさに「芸術の秋」を彷彿させるものだと思つた。題名に拠らずに、内容から「秋」を伝えてくれた彼女の感性に感服した。

## 私のリフレッシュ

佐野 仲山さよ子

コロナの感染が下火になった頃より本に触れる機会が多くなった。佐野市立図書館は徒歩で20分の所にあるのでよく利用している。今年も猛暑の中、図書館に度々通い涼しく本を読み、元気に暑さを乗り越えることが出来ました。その後読書の秋となり、図書館からつとめて俳句以外の本も借り、読め物が多様化しました。

図書館からの帰りは吟行がてら寄り道をしませす。近くの城山公園、朝日森天満宮、佐野厄除大師等を巡り、句帳に書き留めながら帰ります。

図書館は高齢の私にとって心身共に若さを維持できる最高の場所です。

## 図書館に感謝！

松戸 中森ひろえ

3年前までの居住地には、それぞれ徒歩5分と15分の所に町の図書館があり、殆ど予約なしに読みたい本を借り

られて幸せでした。

私の長男は小学生の低学年の時に既に速読術を身に付けており、毎週末に10冊ほど借りて、友達との遊びの合間にすらすらと読破。私はゆっくりじっくり味わうべしと育てられてきたので「凄いなあ!」とびっくりすると「そうなの?」と。

その子が6年生になると、受験をしたいと言出し、毎週図書館ではなく塾に行くようになりました。私の受験勉強は図書館でした。友達と約束して、土日の遊びたい時を図書館に行くことでけじめをつけることが出来ました。たくさん本と図書館に感謝です。

## 学問と権力

志木 汐見克彦

古代エジプトのアレクサンドリア図書館には、現代の書籍に換算して10万冊以上の蔵書があったと推定されているが、戦火を受けたり、その後の研究者の離散もあり、衰退の道を辿った。その知識の喪失は人類の歴史に大きな

影を落としている。

また、始皇帝による「焚書坑儒」によって古代中国でも知識の喪失があった。いずれも権力による学問への介入と言っても過言ではない。

現代においても、権力者が学問の理論に手を出した結果、核分裂や核融合の知識が、原子爆弾や水素爆弾といった兵器を生み出すこととなった。学者は望んでいなかったはずだ。

先の大戦への日本の参戦も、権力によると考えられる。現在でも学問への権力の介入の例は枚挙に暇がない。自然への畏敬、人への愛を、権力者は忘れずにもらいたいものである。

## 「万象ノオト」投稿募集

▽6月号「ランドセル」(2月末日締切)

▽7月号「コップ」(3月末日締切)

▽長さ 本文 17字×19行以内

▽投稿先

〒417-0861 富士市広見東本町14-14

神田美穂子

# 万象作品



江見悦子・内海良太共選

○は佳句に選ばれました。

妣好むめぎす甘めに炊いて秋金沢松田好子  
インカてふ香※めぎす…「三ギス」(魚)のこと。金沢では「めぎす」の馥郁と秋薔薇

○黄落や大樹の裾をつむじ風

玉砂利に神のこゑ聴く古都の秋

爽籟に座して芭蕉の苧績みかな宜野湾宜野 顕

月代の笛に始る祝ひの座

○座より起つ空手演舞や月見酒

鷹の尿しと雨摩文仁は続く慰霊祭

鍾乳洞出て木犀の香に浸る那珂川高山ひさ子

大桶に巻きたる注連や秋の風

○苔むせる元寇の石紅葉散る

水澄むや宮崎宮のさざれ石

小鳥来る災禍の里の梢にも佐倉鈴木隆久

朱の鳥居朱の橋抜けて風の色

○溪谷の闇を深むる星月夜

母在りし日のこと薄れ後の月

○灯台の天女の風見秋高し静岡松永博子

地を這ふや翅の欠けたる秋の蝶

さはやかに沢さらさらとささやけり

灯台の明治のレンズ文化の日



青空に鶏頭の紅きはだてり 志木 汐見克彦

スマホ打つ和装の女小六月

ぶたくさを覆ひて盛る芒かな

○初時雨過ぎたる街に忘れ傘

電線の小鳥友呼ぶ高音かな 燕

鉄柵に腹をぬくめて赤とんぼ

小春日や庭師に貰ふ京の菓子

○苦も楽も忘れてしまひ日向ほこ

大栗の渋皮を剥く一仕事 札幌

冬支度スノータイヤに交換す

待宵の月を愛でつつ白ワイン

○羊蹄山を見上ぐる麓芒原

鮭風に波立つ海や岬鼻

縁側に寝転んで見る星月夜

白鳥の群れに当年子鈍色に

早早と眠りし山に囲まるる

K点を越えしスキーの大ジャンプ

短日や墓地裏の道急ぎたる

菩提樹の葉擦れの音や冬の旅

茅葺の駅舎の足湯秋深し

志木 汐見克彦

日の匂ひ吸ひ尽したる干大根 札幌 園田鶴子

豊の秋無人の農機走りづめ

エプロンに飛び散る鱗鮭料理

竹箒の音のしづけさ秋うらら

○水音とまがふ枯葉の走る音

落葉拾ふ園児のあとを追ふ落葉

一瞬に空闇となす渡り鳥

どんよりと冬の到来雲低し

回覧板をさめ半月仰ぎたり

宵闇の着陸態勢耳痛し

見当らぬ猫や冬日を恋しがり

トーストの香の隣家より秋の朝

○金秋の十勝野丸き地平線

行く秋や彗星きらり西の空

穏やかな東京湾に鰯飛び

軒下に大根干す母腰伸ばし

箸迷ふたね一杯のおでん鍋

不揃ひの粒の楽しきむかご飯

曲るたび迫る峠の紅葉かな

散らかりし本を片づけ秋惜しむ

渡辺志ま

石田 睦

雁部真子

佐々木 茂

島崎 洋

園田鶴子

竹重富子

田邊政代

土門 一平

土門 一

船橋明美

和島良一

冬近し主貼りだす鍋の触れ

秋桜空き地いつばい乱れ咲く

渋皮の剥きごたへある丹波栗

恙なき古里に挽ぐ熟柿かな

草むらを出づる秋蝶弱弱し

沼の辺の薄翅蜉蝣影細き

鈴虫の音の透き通る回復室

総門の鮓を見上げて走り蕎麦

大白鳥番の来る広瀬川

島島に届く読経や翁の忌

ひつそりと雨のひと日の帰り花

道の辺の赤のまんまに雨しとど

○そぞろ歩む杖音かろし文化の日

今日も又追はれては来る秋の蝶

硬き蕾つけて定る菊の丈

日和よく鴨のみとなる瓢湖かな

幹古び明るきものに黄の茸

○梯子車の白き放水天高し

老いてなほ山粧へば旅したく

○古書店のガラス扉に秋の蝶

新庄 曾野部礼子

大江 安藤桂花

天台 富田洋子

新潟 榑原キヨ子

斎藤ヨシ

佐藤幸示

高塚先子

西向きの窓いつばいに稲穂揺れ

自転車を降りて撮りたる草の色

砂遊び凸凹のまま秋暮るる

背負ふ子の寝入る重味や冬あたたか

鳥渡る親掻く風に子に乗せて

二つ三つつじの赤き帰り花

夕暮の人影落穂拾ひかな

芋殻剥く指先あづき色に染め

雨雲を晴すピストル運動会

木犀の香をたたみたる朱印帳

○手水舎の水音はづむ月の寺

倒れたる秋明菊や磨崖仏

大谷石の高き切羽の蔦紅葉

秋天へ平和観音のびのびと

雁の声ルーペ片手に文庫本

ヘルメットの顎紐きゆつと松手入

霧走る三疊の裾をゆつくりと

朝刊は元気の元や冬に入る

○冬麗りハビりに腕伸しけり

赤い羽根の募金に巡る日和かな

新潟 山田季聰

芳賀 稲川清子

鹿沼 渡辺利子

栃木 飯塚キミ

佐野 木村君子

○色変へぬ松や五層の天守閣 佐野 仲山さよ子

見はるかす自刃の山や稲穂波

きらきらと雨粒とどむ朝霧草

蜻蛉の止りかねたる四つ目垣

小春日や自販機に足す鯉の餌

照紅葉杭の鵜羽をはたはたと

亡き友のLINEを手繰る秋の暮 志木

団栗の踏み潰されしアスファルト

皺伸す洗濯物と秋思かな

極楽は仮寝の夢か彼岸花 新座

萩の花散り敷く道に立ち止る

松茸の籠の値札の大きさよ

初時雨膝の痛みに慣れしころ 千葉

文化の日AIに聞く吾が未来

小春日や園児の点呼何回も

鯉と亀擦れちがひゆく小春かな 酒々井

楷紅葉くぐりて巨き孔子像

秋の水満ちて落つるや宥坐之器 うざの

在りし日のままの本棚夜寒かな 佐倉

コスモスも風も気儘にフェスタ果て

推敲の夜に鳴き出す籠の虫  
公園の市営プールに鴨の群れ 佐倉 有泉正夫

○美術展の階下はカフェ文化の日

駅長のカメラに揺るる秋桜

池の鯉群れてひとつに秋彼岸

竹の杖登る石段秋日和

紫蘇の実の所どころに小さき花

蓑虫の糸一本の命綱

○角砂糖とけゆくを待つ秋思かな

ほうじ茶の匂ひかすかに落葉搔

日展の帰り根岸の子規庵へ

白壁に赤白萩のうねりかな

立冬やスマホ片手に道迷ひ

衣被会話のはづむ食事時

起伏なき九十五歳今朝の秋

おしやれ着や夕焼雲をバックにし

いつの間に世代は曾孫七五三 船橋

秋空や病気に好かれ試歩続く

○女一人団地の前で苧殻焚く

病院の窓の夕暮雁渡る 柏

義本美智江

森山洋之助

多田英治

高田みや子

小林あけみ

新谷八郎

杉田富美代

鈴木美根子

立原千代子

米田敏子

山口秀吉

鹿毛満子

熟柿うみがきに今日も昨日の嘴のあと

木の実落つ言葉さがして歩きたる

秋の蚊の止り損ねし白き影

星月夜ページ繰る音さらさらと

藻の池の上をちよんちよん赤蜻蛉

しじみ蝶に追ひぬかれたる秋の蝶

秋の蜂古りしベンチの端つこに

小流れの小石に枯葉とどまりぬ

桐の実のたつぷり垂るる朝かな

色褪せし紫苑斜めや曇り空

空堀に落葉のここだ積みにつけり

投球の少女踏み込む秋日影

竹林の揺ぎて風の白さかな

初冬や雨の花屋に色溢れ

草の先花びらめける秋の蝶

寧謐を思はざらめや星月夜

今朝の鳩からすの声に消されたり

満月や恙無き日の戸を締むる

法要の果つや寄り来る秋の蝶

浄土見ゆ花野の道にひと休み

村田由美子

石川幸子

菊岡緋路

寿多映子

中森ひろえ

渡部洋子

満ちて引く母の寝息の夜長かな市川 奥澤よし江

茶の花に押し合ひ圧し合ひ蜂の尻

初冬や子等の歌声いや増せる

筑波嶺は遙けし秋の小さき旅東京 安藤美酒々

拝殿筑波山神社の巨大な鈴に秋日差す

賑賑し小春のがまの油売り

園児乗る手押し車や秋の蝶 大場八朗

○新総裁決りて秋の深まれり

デュランタてふ小花紫秋深し 燕木静子

友来る酒飲み語り秋の夜

秋晴や会ひし曾孫は眠り姫

秋日和これが最後と同期会 北口富栄

新酒酌む最後となれる同窓会

菊日和今はかなはぬ一万歩

芭蕉忌や芭蕉稲荷に雨上がる 齊藤孝夫

秋の月夜空の真中動かざる

○火恋しサツクス蒼く光る土手

鱸雲受賞分けあふ被曝の人 高野翠子

○白秋忌帰宅の部屋にシチューの香

待ち人やおでんの匂ふ四畳半

日の匂ふタオルを頬に小六月  
ブロックの穴より出づる螢草

東京 鶴田智美

久闊を叙して集へり零余子飯  
猫じやらし右に左に散歩道

駅前の煤け暖簾の焼鳥屋

中澤桃子

銀杏散る大樹の下の地藏尊

○木の実踏むトロンボーンの音の中

朝粥を啜りて眺む石路の花

橋本紀代子

湖のをちこち巡り彼岸花

秋日和水面に映る晴れ姿

金木犀朝餉に混じり匂ひ立つ

長谷川はるみ

ほうとうの南瓜嫌ひは隅に寄せ

秋雨や忍野八海けぶりたる

区境を越え木犀の香り初む

リズミカルな会話の授業小鳥来る

秋深し両の手隠し猫眠る

竹ぼうきの老人一人落葉散る

杖つきて見上ぐる先は冬桜

風に乗り落葉転る朝の歌

秋まつり幼き孫のフラデビュー

前川 昇

曇り空鴉鳴きゆく秋の暮

秋時雨傘を並べてちぢと孫

赤黒き富士特産のりんご噛む

東京 松本幸男

一徹なおやぢ石挽く走り蕎麦

秋深し尾瀬に小舟の朽ち果てて

干柿に届く武甲山の入り日かな

調布 荒井 仁

溪を行く車窓いつぱい真弓の実

無人駅にアニメ画貼られ文化の日

草むらの陰に秋蝶深大寺

三鷹 南場雅子

秋の陽に恵比須大黒真新し

石路の花川辺の水の清清し

雨上がり赤に染まれる酔芙蓉

府中 竹村晃子

鳥渡る多摩の川波ゆつたりと

昼の月蔓草からむ無人店

葉屋のガラスケースに猿茸

鷺沼 松井宣夫

武蔵野は雑木紅葉や独歩の地

○秋の暮影踏み遊ぶ子供たち

木枯や篋の幹響き合ひ

日野 松原悦子

村沈むダムに小春の日差しかな

桜落葉埋め尽したる神田川

蛾も蜂も来る紫の葛の花青梅 横井一美

電柱に絡みつきたる蔦紅葉

咲くまでは気づかぬところ彼岸花

秋の蚊の一途に我を追ひにけり横浜 大駒泰子

枝折戸に紫式部の実のこぼる

釣糸の前に大鰯跳ねにけり

晩秋のたそがれ時や富士黒き岡 元枝

鳥影の大きく過る冬はじめ

○星見えて凧一号去りし空

ソーラン節運動会をあふれたる 加藤和子

誘はれて柳葉魚の刺身旅に食ぶ

土手の萩こぼれて道をまつ白に

夏鴨に外つ国の子ら声あぐる 柴田雅春

くちびるのじわりと乾く油照

蟻の塔新しき土積みあげり

風に揺れ色纏れあふ秋桜 長野高朋

三味の音に身振り嫋やか風の盆

石垣の狭間に生ふる鳳仙花

山寺の鐘の余韻や曼珠沙華 森 桂子

○書を開き独り想へる夜長かな

シャンソンを独り聞く夜の秋思かな

札幌もやうやく秋と便りあり横浜 豊 美佐子

三本の鉄塔染めて秋夕焼

仏壇の竜胆一輪開き初む 横山ユキ子

銀杏を踏みつぶしては子ら騒ぐ川崎

通院の杖にもなれて冬の草

冬帽子明日は散歩に出掛けんと

庭を掃く背に香れる金木犀茅ヶ崎 久保田富士子

○新紙幣財布に揃へ文化の日

一里塚せり出す松に新松子

新松子水面をゆらす鯉の群れ伊勢原 山本カツ子

榎殻の棚田に燻くわる空の紺

椗の実の殻斗に細き縞模様 古谷悠紀子

数独の超難問に夜長の灯松田

初冬の日をかき分けて大山へ

破れ破れの蜘蛛の囀わたる冬の川 飯田優子

葛嵐いちごハウスの骨あらは静岡

蔵壁に吊す箒や律の風

寒露の雨石垣の苔光りをり

小兵なるへつびり腰の草相撲 伊東文恵

秋光の動物墓碑に水供ふ

蟪蛄の少年の脛這うてをり

鴉二羽案山子の肩を突きをり

静岡

海野俊彦

仏壇へ香嵐溪の紅葉活け

○高窓に十六夜の月迫り来る

ななかまど歩荷背負子の守り札

傘傾ぐ喪服の袖に秋の雨

渴筆の銀墨撥ぬる文化祭

秋刀魚売るねぢり鉢巻しやがれ声

秋の夕枕草子読み耽る

少しづつ片付け進む冬隣

○触れ太鼓秋空わたり村わたる

薄墨の富士を遠くに寒露かな

山風に葉のちぢれたる葡萄棚

松茸のパックにあふれ道の駅

玉砂利を蹴つて詣づる七五三

天高し大応国師産湯の井

赤蜻蛉谷深きより湧きいづる

さはやかや親子の放つしやばん玉

秋草や篝錆び居る城の門

梵鐘の乳鋌に休み秋の蝶

青天や鳶の眼下の運動会

杉田義則

杉山千鶴子

杉山巳代

高井明子

高橋一夫

田中秀幸

雨上がり夜道を鹿の跳ねてをり

静岡

筑地裕子

紫蘇の実を扱けば香り広がれり

ハンモック揺す風あり松林

名月の海に筋なす駿河湾

釣り上げし鯊より砂のこぼれたり

虫送り畦を巡れる子らの歌

七輪の炭火盛んや初秋刀魚

翠黛の山の連なり薄原

曼珠沙華城跡の日の沈み行く

泣きながら塩撒くをのこ宮相撲

大手門の石垣に沿ふ赤まんま

熊笹の一葉一葉へ露の玉

月を背に足音残し友帰る

○かさかさと熊手に絡む散紅葉

食堂にジャズの演奏冬に入る

山城の石垣の反り虫集く

○秋の蝶欠けたる翅を開きをり

城跡の草に湧きたる赤とんぼ

文化の日駝鳥見あぐる幼かな

秋祭巫女の白衣のひるがへる

秋暑し檻の食め蟻い獣い舐め合ひて

内藤允昭

中澤祐一

永田公香

野崎浩子

長谷川洋子

矢野喜久江

枯蓮や池渡りゆく山の風焼津 小梁洋子

○文化の日女力士の勝名乗り

撫で仏くづるるままや野紺菊

大獅子の風孕みたる秋祭掛川 鈴木美由紀

添水鳴る風の止みたる山の宿

母と子のピエロのメイク文化の日

月照す川中島の合戦場掛奇 鈴木裕一

稲光休耕田を照し出す

今年藁切り刻まれて田に吹かれ

表裏焦げを濃くして焼き秋刀魚金沢 上野富貴子

スーパールの米売り切れる稲の秋

○地震跡もすべて呑み込む秋出水

友来り椅子にもてなす亥の子餅

道暗し帰宅の友に紅葉散る

七五三転ぶ子供を抱きかかへ

長き夜やベーターベンを友として

蝓螂の外來種やもつやつやと

雁ならむ畦に並びて吾を見る

参道に鈴の音はねて七五三

○銀漢や言葉やさしき小津映画

廃校の百葉箱や小鳥来る

北野陽子

新出祐子

菅原雅子

宿坊の水屋の音や濃りんだう金沢 田上ナツ子

鳳凰の九谷の赤絵秋深し

色変へぬ松に潮風燈のぼる

水やりてサルビアに緋のきざしたる

真夜中の月にそひたる一つ星

中庭を皓皓として更待月

銀髪の紳士張り切る村芝居 宮崎恵美

物置に祖母のたんすや藤袴

さはやかや地下足袋はいて異国人

一輪の木槿高高青空にかはく 能任康子

○テント張る掛け声明日は運動会

秋薔薇ひときは庭を明うす

牡蠣フライあの子この子に届けたし白山 朝倉みゆき

枝先の三つ四つ返り花見上ぐ

佗助の花びら透くる朝日かな

御取越お斎に和む同行衆 鶴尾正江

なんとなく踏みたき心地霜柱

暮るるまで癒されてをり式部の実

草紅葉口全開に猪の畏珠洲 井端久子

方丈に雨山の色紙秋しぐれ

竹林に緋の燃え立ちぬ曼珠沙華



正直に生きよと父の衣被牧野川口和代

城跡の濠の敗荷崩れをり

遠嶺までよく晴れ渡る鳥威し

糸一閃蜘蛛のサーカス始まりぬ徳島池田やすし

秋空に姿は見えぬ鳥の声

また戦地球儀回す星月夜

友と居て友と分てる良夜かな

うづくまる猫に声かけ後の月

蜘蛛の囀の物干し竿に伸びてゆき

ブランデーグラスに凜と野菊かな

秋霖の雫やさしく鉢植ゑに

母偲ぶ秋や生誕百カ年

彼岸花田んぼの溝を跳んでみし

一発の轟音放ち雷落つる

○暗闇に猫の目光る無月かな

落鮎や架け替へ近き潜水橋小松島

いわし雲あみ棚に傘忘れたり

洪柿むく祖母の指先蘇る

入潮の川幅狭し花芒松山入河大河

万歳のびりも一緒や運動会  
ざざぶりや草を打ちたる芋嵐

宮走る双子の男の子七五三福岡園田清子

秋祭ブラスバンドはダンス付き

カメラ好きは父親譲り山粧ふ

蟪蛄の怒りをさそふ穂先かな

二十億年経し微生物秋暑し

○初秋刀魚深海の塩軽くふる

シヤンソンの身にしむ齡赤い靴太宰府

壺屋焼の金城の魚秋澄めり

扁額は伯父のねずみ絵月見月

筆硯孫に譲りて十三夜宮崎

簡單に茹でて一皿菊鱈

小窓より猫飛び降りる菊の中

落栗の増して祖父母の家近し門川

稲架組みてタイヤの跡のやうな雲

被災地に神仏なきや秋出水

葛の葉の高木覆ひ隠しけり国富

○高木に枯れし葛の葉揺れにけり

栗の皮朝より剥きて栗ごはん

抽斗の奥に日の丸敬老日那覇

をすめすの網挽きもどす天高し  
那覇まちに大綱挽けり十・十忌

稲嶺有晃

鶴田輝代

美山留唯

湯地朽子

請関ゆかり

山口孝治

妻留守の二日続きの茸汁 那覇 稲嶺有晃

散らかして食卓楽し文化の日

○冬銀河レゴブロックの未来都市

見て嗅いで籠にもどせる茸かな

大城末治

城門の影長く置く十三夜

井戸跡へ草踏む音や冬はじめ

鳥渡る雲の一朶を置き去りに

辺野喜宝来

木槿垣こんなところに豆腐売り

○満天の星の重さや黒葡萄

赤蜻蛉野水へ影を落しけり 沖縄

玉城玉常

秋麗やノーベル賞の被団協

○彗星を阻む雨雲秋の宵

秋雷や肩を小蟻の這ひ来る ベリシ

森尾 舞

黄昏の迫る川瀬に秋の鷺

〈お詫び〉

12月号 p 35 上の中村 優様、

p 62 下、p 63 上の伊東文恵様のお名前に誤りがありました。

深くお詫び致します。



今回も古今の佳句・名句に触れながら遊んでゆきましょう。空所にウ冠（ハ）の付く漢字を入れてみましょう。

- 1 初□の藍と茜と満たしあふ 山口青邨
- 2 一□に遊女もねたり萩と月 松尾芭蕉
- 3 あをあをと□をのこして蝶わかれ 大野林火
- 4 岩鼻やここにもひとり月の□ 向井去来
- 5 某は□山子にて候雀どの 夏目漱石
- 6 葉桜の中の無数の□さわぐ 篠原 梵
- 7 屋根裏の出□が開いて秋のばら 内海良太
- 8 □光といふあらば見せよ曼珠沙華 細見綾子
- 9 流水や□谷の門波荒れやまず 山口誓子
- 10 まさをなる□よりしだれ桜かな 富安風生
- 11 青鷺の□にまとへる暮色かな 飛高隆夫
- 12 □晴やあはれ舞妓の背の高き 飯島晴子

【正解】

- |   |   |    |   |    |   |    |   |
|---|---|----|---|----|---|----|---|
| 1 | 空 | 2  | 家 | 3  | 空 | 4  | 客 |
| 5 | 案 | 6  | 空 | 7  | 窓 | 8  | 寂 |
| 9 | 宗 | 10 | 空 | 11 | 常 | 12 | 寒 |

# 万象作品の佳句

江見悦子

黄落や大樹の裾をつむじ風 金沢 松田好子

季語「黄落」は、銀杏、樺など黄葉した葉が落ちることをいう。作者は、大樹の空からはらはらと散る黄葉の中にいる一瞬、大樹の裾を渦巻くつむじ風に目を留めた。地に落ちた黄葉をくるくると絡めとっていく風である。空からは黄落、地にはつむじ風、作者は自然の一瞬間の変化を楽しんでいるようだ。対象に見入る写生の力があってこそこの句。

座より起つ空手演舞や月見酒 宜野 宜野 顕

名月を愛でながらの宴席に酒は付き物だ。宴たけなわの頃になると、銘銘が自慢の芸を披露する。さあ次は空手の名人、指名を受けてゆつくりと胡坐をほどこき、立ち上がる男。見事に空手の型を舞い始める。「座より起つ」という具体的な描写が、宴会の様子を伝えている。省略の効いた句。

苔むせる元寇の石紅葉散る 那須川 高山ひさ子

鎌倉時代中期、蒙古(元)による二度の日本侵攻(文永の役、弘安の役)があった。「元寇」と呼ばれる。大風によって元軍は敗退したが、元の軍船に使われていた石で作られた碇が、博多湾を中心にして多く発見されているようだ。引き上げられた石は今や緑の苔に覆われ、その上に紅葉が散って

いる。紅葉は海底に沈んだ兵士たちへの供花のようにも思える。色彩的にも美しい句となった。

溪谷の闇を深むる星月夜 佐倉 鈴木隆久

作者は山中の溪谷の闇の中で星月夜を仰いでいる。星月夜は、溪谷の闇の深まりがあるからこそ厳肅で美しい。「闇の深まる」ではなく、「闇を深むる」としたところが手柄。

灯台の天女の風見秋高し 静岡 松永博子

灯台の塔頂に風見として天女像が置かれているとは、静岡県清水灯台のことだろう。美保の松原の天女の伝説から作られたもので、明治45年に点灯した日本最初の鉄筋コンクリートの灯台である。この句、句意は明瞭。上五から中七が助詞「の」でつながれ、下五に季語「秋高し」が置かれている。空に向かったおやかに天女が舞う景色を思い浮かべた。

初時雨過ぎたる街に忘れ傘 志木 汐見克彦

今年初めての時雨がひっそりと過ぎ、初冬の街に喧騒が戻って来た。もう傘はいらないと、駅のホームに、街路樹の脇に、店の前に、沢山の傘が置き去りになっている。便利に使われてすぐに放り出されてしまう安価なビニール傘が多い。初冬の都会の風景を俯瞰して捉えた佳句。

苦も染も忘れてしまひ日向ぼこ 蕪 渡辺志ま

冬のやわらかな日差しを受けて縁側で日向ぼっこ、昭和の時代を思わせる情景だ。この時間だけは誰にも邪魔されない自分の時間。冬日の暖かさにくるまれると苦も染も忘れてしまふ。至福の時間を味わっている作者。

私の住んでいる京橋の地名は、淀川支流の寝屋川に今も架かっている橋の名前に由来し、大坂城（現在の大阪城）から京へ上る京街道の出発点である。

大坂城は南の住吉大社辺りから北へ細長く伸びる上町台地の北端に築かれ、周辺には数多くの歴史的建造物や寺社などが並んでいる。特にこの地域は古代から戦略的政治的に重要な所で、時代ごとにその名が登場する。

遡れば7世紀半ば、孝徳天皇が難波を都と定め、難波長柄豊崎宮を築いた。後に天武天皇も前期難波宮をその地に築いた。8世紀半ばの聖武天皇の後期難波宮の大極殿跡には、当時と同じ凝灰岩の大極殿基壇が復元され、現在では前期・後期の建物跡を複合的に整備した史跡公園となっている。

また5世紀に建てられた大型高床式倉庫建物群の柱穴跡と、茅葺高床建物一棟も法円坂建物群として復元されている。

15世紀に蓮如の建てた大坂御坊（後の石山本願寺）が焼失した跡に、秀吉が大坂城を築き、その後大坂冬の陣・夏の陣で豊臣方と家康方が雌雄を決した。現在の天守閣は昭和初期に大阪市民の寄付により再建されたものであるが、その地下には家康の城の、またその下には秀吉の城の遺構が眠っている。

近代では、旧日本軍の第四師団司令部や砲兵工廠が置かれ、戦後その広大な跡地には、大阪府庁舎を始め、府警本部、官庁建物群、公立病院などが配置され、大阪府の行政の中心地が形成された。また、大企業や報道機関などの高層ビル群は、ビジネスパークの名を冠している。

難波津に咲くやこの花冬籠り

今を春べと咲くやこの花

王仁わに

（古今和歌集仮名序・百人一首序歌）

難波津は考古学的な場所の特定はされていないが、現在の御堂筋辺りが当時の大阪湾の海岸線であり、その津の一つと考えられる。大陸からの玄関口として多くの渡来人が渡って来た所でもある。

源八を渡れば梅のあるじかな 蕪村

源八は毛馬から少し下流の渡し場。大坂毛馬出身の蕪村も難波の梅を詠んでいる。

現代的な高層ビル群を背景に、復元ではあるが古代の高床式倉庫や大極殿基壇、中世の大坂城と当時の櫓や石垣などが同時に見られるこの界限は、珍しくも貴重な場所である。

# 新中央句会報 (11月例会)

令和6年11月24日(日) 東京文化会館

(出席26名)

江見 悦子 主宰選

眠る師の横顔美しき末の秋 南雲 秀子  
茶の咲いて日ざし背中にたまりけり 榎本 文代  
荒行の水音闇の凍てを裂き 三屋 英俊  
晴晴と独りのワイン神の留守 吉中 愛子  
行き場無き災禍の瓦礫能登時雨 大久保 進  
護摩壇の天蓋煤け冬に入る 沢辺 たけし  
竹の庭冬 青空を丸くぬく 田中 道江  
原子力空母入港神の留守 柳澤 宗正  
雁行の町に夕餉の灯かな 大久保 進  
攻め焚きの窯の背山や五郎助ほう 神田 美穂子  
石路の花俎岩へ波うすく 田中 道江  
小春日や湯屋の煙の空に溶け 一由 久美子  
④ 風の吹けば芥のごとき憂さ 久留島 規子

④ 風の吹けば芥のごとき憂さ 久留島 規子

「芥のごとき憂さ」という言葉に惹かれた。深刻さを伴う「悩み」ではなく「憂さ」、しかも「芥のごとき憂さ」なのだ。自身の辛さを客観化した表現がいさぎよい。風の力を借りて

「憂さ」を吹き飛ばし、これからに向かって行こうとする決意表明、そんな力強さを感じた。

晴晴と独りのワイン神の留守 吉中 愛子

陰暦10月、諸国の神神が出雲へ旅立ち社を留守にするという「神の留守」。この季語と「独りのワイン」の取合せが面白い。誰に遠慮することもない独りの夜、晴晴と味わっているのは赤ワインか白ワインか、「晴晴」が実感。

竹の庭冬 青空を丸くぬく 田中 道江

竹が丸く植えられた庭に、丈高く伸びている竹の群れ。あたたかも冬の青空を丸く突き抜いているようだ。思い切った把握の写生句である。

原子力空母入港神の留守 柳澤 宗正

11月下旬、アメリカ海軍横須賀基地に原子力空母が入港した。ちょうど「神の留守」を狙ったかのように。この季語が絶妙。日米安全保障条約のもとに繰り広げられる光景だが、作者にとっては疎かにできない社会的な事象であった。課題意識を大切に、今後も詠み続けていただきたい。

中村 千久 選

鎌鼬 錆朱の月の上りけり 沢辺 たけし  
冬の蝶 石段ごとに影落し 下嶽 孝一  
茶の咲いて日ざし背中にたまりけり 榎本 文代  
行き場無き災禍の瓦礫能登時雨 大久保 進

替女唄を枯野の風に聞きあたり 三屋英俊

立冬の三日月しるし藍の空 砂地宏子

天辺に鷲雪吊を統ぶるかに 江見悦子

蛇行せる川を抱きて大枯野 神田美穂子

林檎赤し母の自慢の真白き齒 砂地宏子

雪吊を抜け芝の空がらんどう 江見悦子

攻め焚きの窯の背山や五郎助ほう 神田美穂子

茶柱のすくつと立ちて冬に入る 星野信子

里山に薪割る音や小六月 村田由美子

里山に薪割る音や小六月 村田由美子

里山に薪割る音や小六月 村田由美子

季語「小六月」の音が心地よい。初冬の里山では既に冬支

度が始まっているのだ。暖炉に焼べる薪を割っては、軒下に

積んでゆく作業。その小気味の好い音が里山に響いている。

新中央句会は、同人と会員が共に鍛錬する場であることを、

熱心な会員である由美子さんの句が教えてくれている。

行き場無き災禍の瓦礫能登時雨 大久保 進

昨年正月の地震の復興が進まないまま、秋には洪水の被害

が追い打ちをかけた能登。弱者を容赦なく切り棄てるのはこ

の国の悪弊である。「行き場無き」は瓦礫に留まらず、被災

した能登人の思いでもある。そほ降る「能登時雨」が切ない。

茶柱のすくつと立ちて冬に入る 星野信子

とれて嬉しかった。令和6年の新同人に推挙されただけあつて、日常の何気ない一齣に「冬に入る」の季語を取合せた。一句も「すくつと」立ち上がった。きっと良い事がある。

榎本 文代 選

神の留守居留守決め込む妻の留守 大久保 進

鎌鼬錆朱の月の上りけり 沢辺たけし

冬の夜やポトフを煮込む鍋の音 神田美穂子

冬の蝶石段ごとに影落し 下嶽孝一

縁日やいつもの所八つ目焼 松井宣夫

小春日の浅草六区皿廻し 小池清晴

替女唄を枯野の風に聞きあたり 三屋英俊

冬に入るくぬぎの幹の深き皴 小池清晴

色変へぬ松や弁慶腰掛石 田中道江

百均の眼鏡びつたし文化の日 長谷川信也

諸蔓のジャンゲル出づる大いたち 吉中愛子

蓮根掘る阿修羅のやうな顔をして 塗木翠雲

荒行の水音闇の凍てを裂き 三屋英俊

荒行の水音闇の凍てを裂き 三屋英俊

荒行の水音闇の凍てを裂き 三屋英俊

修行僧の荒行で知られている千葉の中山法華経寺。荒行は

寒を含む百日間、毎日7回の水垢離を繰り返す行事である。

真夜中の凍えるような寒さの中での修行が「闇の凍てを裂

き」と、水音を通して見事に詠まれた。

鎌鼬 錆朱の月の上りけり 沢辺たけし

突然に皮膚が裂けて鎌で切ったような切り傷が出来る現象が「釜鼬」。現在では気象現象の一つとされているが、怪奇なものようである。「錆朱の月」からその妖しさや不思議さが伝わってくる。

百均の眼鏡びつたし文化の日 長谷川信也

百均の商品が並ぶ百均ショップ。店内は豊富な品揃えで思いがけない物も見つかる。眼鏡もその一つ。面白半分で購入してみたのかもしれないが、よく見えて驚いたのだろう。その気分を表したのが、下五の季語。

神田 美穂子 選

鎌鼬 錆朱の月の上りけり 沢辺たけし

荒行の水音闇の凍てを裂き 三屋英俊

小六月ストリートアートは奔放に 内田郁代

花小さく確かな在り処冬桜 内田郁代

護摩壇の天蓋煤け冬に入る 沢辺たけし

ふりおろす長き釣竿照紅葉 南雲秀子

林檎赤し母の自慢の真白き歯 砂地宏子

百均の眼鏡びつたし文化の日 長谷川信也

冬の川珈琲店のジャズひびく 榎本文代

雁行の町に夕餉の灯かな 大久保 進

小春日や湯屋の煙の空に溶け 一由久美子

天気図に渦巻四つ神の留守 奥 太雅

④ 蓮根掘る阿修羅のやうな顔をして 塗木翠雲

⑤ 蓮根掘る阿修羅のやうな顔をして 塗木翠雲

⑥ 蓮根掘る阿修羅のやうな顔をして 塗木翠雲  
阿修羅像と言えは奈良興福寺のものが大変有名で、眉根をちよつと寄せ愛いを含んだ表情に惹かれる。作者は泥まみれになり真剣な表情で作業している人を見て、一瞬阿修羅の姿を想像したに違いない。類想感のない句と思う。

林檎赤し母の自慢の真白き歯 砂地宏子

きつとお母さんは虫歯もなくよく手入れた歯の持ち主で、作者にとつてもご自慢だったに違いない。林檎の赤と白い歯との取合せがよい。こんなところにも詩因はある。

鎌鼬 錆朱の月の上りけり 沢辺たけし

晴れた夜空に浮かぶ錆朱色の月、夜更けのその月に少し不安を覚えた作者。かつて「鎌鼬」は妖怪の仕業とされていたが、現代では気象現象の一つであるとされている。「錆朱の月」と不思議な季語との取り合せで、幻想的な一句となった。

今後の新中央句会の予定

▽2月23日(日) 東京文化会館 小会議室 13時より

▽3月23日(日) 東京文化会館 中会議室 13時より

# 俳句

## 2月号 予告

1月25日発売

予価1,300円(本体1,182円)⑩

巻頭作品50句 長谷川 耀

作品21句 藤本美和子・井上康明

### 特集

## 選ばれない 言葉たち

▽総論

▽解説

▽番外編

言葉の取捨選択の「捨」  
使えるなら使いたいけれど、まだ使えない言葉  
古風となつてしまい、選はなくなつた言葉  
俳句において強く意味を持ちすぎた言葉  
当てる字の判断/ルビつきの判断/  
選べなさそうで選べてしまう言葉

句集特集 栗林浩『あまねし』

季寄せを兼ねた俳句手帖春

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売！ 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>) など電子書店で購入できます。

### 最近の名句集を探る

座談会

岡田一実 『醒睡』

阪西敦子 『金魚』

黒石徳将 『渦』

司会 筑紫磐井  
網野月を  
大西朋  
吉田林檎

田口登句集

人と作品

「神の滝」

谷中隆子句集

「あかねさす」

「雲の峰」創刊35周年記念

京都吟行……角野京子

▽巻頭三句

西村和子

松尾隆信

鈴鹿呂仁

長島衣伊子

澤井洋子

高崎公久

▽今月の華

勝浦敏幸 / 向瀬美音

▽俳句と短歌の10作競珠

村越 敦 + 山川 築

▽好評連載

成瀬政博

とりあえずの日々

筑紫磐井

俳壇観測

坂口昌弘

忘れ得ぬ俳人と秀句

青木亮人

句の手触り、

俳人の響き

大西朋

俳句へのまなざし

井上泰至

俳句の詩語

イメーシ辞典

神作研一

てのひらの江戸

―古典籍を旅する―

藤村公洋

俳句のまみ

秘矢まりえ

# 俳句四季

Haiku Shiki

2025年2月号

1月20日発売  
定価1100円(税込)

<https://www.tokyoshiki.co.jp/> 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180



# ルビの小函 (2月号)

「同人作品」「万象作品」に掲載された漢字表記でルビを振らなかったもののうちから、読みにてこずりそうなものを拾ってあります。作品鑑賞の参考にしてください。太字は季語ですから歳時記で確かめてください。読みは現代仮名遣いにしてあります。

(編集部・校正担当)

- |                     |                  |
|---------------------|------------------|
| 4 晦(つごもり)           | 28 沢鷲(ちゅうひ)      |
| 7 歩荷(ぼっか)           | 賓頭盧(びんずる)        |
| 12 檀の実(まゆみのみ)       | 灯(ともしび)          |
| 13 海猫(ごめ)           | 29 木端(こっば)       |
| 14 矮鷄(ちゃぼ)          | 牛膝(いのこずち)        |
| 穉穂(ひつじほ)            | 籬(たが)            |
| 15 筥迫(はこせこ)         | 海桐の実(とべらのみ)      |
| 16 猿茸(ましらたけ)        | 得度(とくど)          |
| 17 関(とぎ)            | 30 狼煙場(のろしば)     |
| 18 言祝げる(ことほげる)      | 戦ぐ(そよぐ)          |
| 伐折羅(ばざら) *薬師十二神将の一つ | 31 掩体壕(えんたいごう)   |
| 19 下枝(しずえ)          | 容(かたち)           |
| 落羽松(らくうしょう)         | 32 撮み喰ひ(つまみぐい)   |
| 20 七五三祝(しめいわい)      | 46 爽籟(そうらい)      |
| 22 土器(かわらけ)         | 芋積み(おうみ)         |
| 23 長け(たけ)           | 47 当年子(とうねご)     |
| 帷子川(かたびらがわ)         | 48 凸凹(でこぼこ)      |
| 通草(あけび)             | 51 忍野八海(おしのはっかい) |
| 24 虚栗(みなしぐり)        | 52 翳やか(たおやか)     |
| 笑栗(えみぐり)            | 殻斗(かくと)          |
| 臭木の実(くさぎのみ)         | 53 香嵐渓(こうらんけい)   |
| 25 煮染(にしめ)          | *愛知県豊田市の地名       |
| 酢橘(すだち)             | 背負子(しょいこ)        |
| 26 釦(ボタン)           | 扱けば(しごけば)        |
| 節樽(ふしくれ)            | 翠黛(すいたい)         |
| 革手套(かわしゅとう)         | 白衣(びやくえ)         |
| 27 新松子(しんちじり)       | 54 添水(そうず)       |
| 大拙(だいせつ) *鈴木大拙・仏教学者 | 59 鎌鼬(かまいたち)     |
| 日に異に(ひにけに)          | 60 瞽女唄(ごぜうた)     |
| 28 抽斗(ひきだし)         | 64 蝻斯(きりぎりす)     |
| 考(こう) *亡父のこと        |                  |

# 北 南 西 東

## 消息等

江見悦子主宰、内海良太名誉主宰の句

「くちら」12月号に

毬栗や土蔵に小さき明り取り 悦子

水神の祠に喜雨の水溜り 良太

「初蝶」12月号に

すこやかに双子生まるるさくらんぼ 悦子

「俳星会」第七十号に

山茱萸の黄やまなかひの痛痒き 悦子

霜解の轍 厩舎へ続きけり 良太

「雉」創刊40周年に祝句3句

師の筆の「雉」生き生きと明の春 悦子

若水を汲むや淡海の湖ゆたか 悦子

にぎやかに年酒は加賀の常きげん 悦子

「鶴」12月号「現代俳句を読む」に松原智津子さんの句

神輿渡御予報通りの雨の中

「万象」9月号 作者は天気予報が外れてくれればと思っていたが雨が降って来てしまった。予報通りに作者の残念さを表した句である。自然相手ではどうにもならないが、それでも祭衆の意地で神輿渡御は予定通りに進行したのである。私も祭行事

の世話人の時に同じような経験がある。雨は大した事が無く大人も子供も楽しんで良かったと思ひ、このような住民がコミュニケーションの取れる行事(祭等)は残して置きたいと思う。(五十嵐元克)

「浦和句会」二年振りの吟行

昨年11月17日に東京本駒込で吟行句会を開催、5名が参加しました(他3名が通信投句)。本駒込在住の同人・桑原優美子さんの案内のもと、東洋文庫で東洋学の歴史的文獻を鑑賞した後、併設の隠れ家的カフェで昼食休憩、午後は江戸大名庭園の六義園で色づき始めた紅葉を楽しみました。

(三村紀子)

古池を風の撫でゆく小春かな 千久

池の面の紅葉をおきて雲のゆく 宏子

七五三殿も歩きし六義園 純子

初冬のモリスン書庫のうすあかり 優美子

池の面に触れんと漆紅葉燃ゆ 紀子

千枚の棚田けふるや能登時雨 右近

あちこちに柿輝きて和紙の里 桃子

追ひてゆく前へまへへと蟲斯 康次

丹波市俳句協会主催

第24回たんば青春俳句祭11月17日開催

細見綾子賞

綾子忌や丹波木綿の草の色 成瀬真紀子

角川「俳句」12月号「令和俳壇」森田純一郎氏の特選に井端久子氏の句

墓洗ふ地震にずれたるまま洗ふ

珠洲市に住む作者、今年の1月の能登半島地震の被害を詠み伝えている。募参を詠んだこの句も、一切主情を籠めず淡々と詠むことにより、却つて読者に悲しみを伝えている。写生の力を感じる。

「万象」神奈川県支部吟行句会(ご案内)

日時 3月28日(金) 12時半〜16時

吟行地 元町・港の見える丘公園・中華街他

会場 かながわ労働プラザ(エルプラザ) 4F 第4会議室

アクセス J R石川町駅(北口) 徒歩3分

参加費 千円 投句・選句数各4句

問い合わせ先 柳澤宗正・榎本文代

東西南北掲載記事募集

各地の句会・吟行の様子や雑誌掲載記事などをお知らせ下さい。(報編集部)

←この線より切り取ってください

# 万象作品

令和七年

六月号

(三月十五日締切)

都または市・町・村名	
姓 号	がなり
年齢	

(句の表記は歴史的かなづかいで) (\*の枠内には何も書かないでください)

\*

\*

\*

\*

\*

9 3 9 0 3 6 4

射水市南太閤山13  
|  
24

万象作品投句係行

110円切手を  
貼ってください

氏名	住所

〈通信欄〉

## 編集後記

▽俳句という非日常を遊ぶとき、別人格となるための面白い工夫が俳号ではないかと思えます。高橋行雄は師の山口哲子から「鷹羽狩行（タカハシユギョウ）」を貰い、その哲子は本名の新比古（ちかひこ）をもじったとか。

俳号を持つたぬは勝手次第ですが、いつもの自分とは違うアイデンティティを獲得して自由の翼を広げる一助になるのではなからうかと。句会で名のりとお札を兼ねる「センキユー」は便利なものです。（千久）

▽今年の節分は2月2日。いつもより1日早く春を迎えます。病氣や災害を追い払うべく、思いっきり福豆を撒きたいものです。

昨年師走に久しぶりに父母の墓を訪ねましたが、周りには墓仕舞いして更地になった区画が目立ちました。少子高齢化の時代、終活の項目に、お墓の整理も加えなくてはならないと、実感しました。（規子）

▽令和7年の「季節風」の新年大会は、私の句会が当番。句の募集、詠草作り、同人への選句の依頼、結果の選句集作り、会場探し、弁当の手配等等……。会員の高齢化もあり、思い切つて簡略化を図りました。（美穂子）

▽昔から秘かに尊敬している詩人が二人いる。一人は石垣りん。「自分の住む所には／自分の手で表札をかけるに限る。」で始まる「表札」の清清しさ。もう一人は茨木のり子。詩集「倚りかからず」にも示される凜とした生き方の詩人。石垣りんは2月に生まれ、茨木のり子は2月に亡くなった。（宏子）

▽糠床から始まった妻の道楽は、次に吊し柿へ。今、我が家のベランダの物干し竿には吊し柿が6個ぶら下がっている。コバエが来るので、虫コナーズをぶら下げた。渋柿の値段よりも虫コナーズの方が高い。この編集後記を読む頃には、美味しい干柿を食べていることだろう。そうなると、来年は柿の数が増えそうだが、洗濯物を干す場所が減るので頭が痛い。（清晴）

### 会員を募ります

会員は左記の会費（誌代）を前納していただきます。

一年分 一二、〇〇〇円

会費の納入は左記の振替をご利用ください。新会員は必ずその旨明記。

郵便振替口座 00230・0・103581

万象俳句会

住所変更届・退会届等については、必ず封書又は葉書にて、左記へご連絡願います。

〒284-0015 四街道市千代田1-7-10  
塗木翠雲

### 万象 二月号

第二十三巻 第十一号  
通巻 第二七五号

令和七年二月一日 発行

主宰	江見悦子
発行人	江見悦子
編集人	中村千久

〒168-0072

東京都杉並区高井戸東一三二六 603

万象発行所

☎〇三六三二四一五七九六

万象 第二十三卷 第十一号 (通卷二七五号)

平成十四年十一月十三日  
令和七年二月一日発行  
第三種郵便物認可  
(毎月一回一日発行)